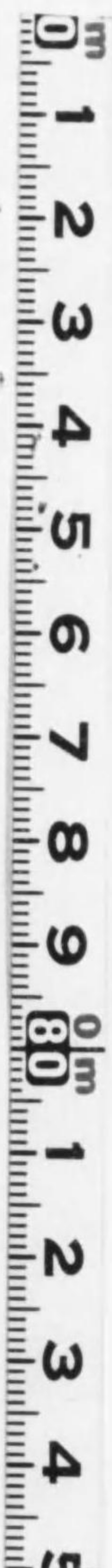


特258

421

雨土攝國雷  
月車待栖電

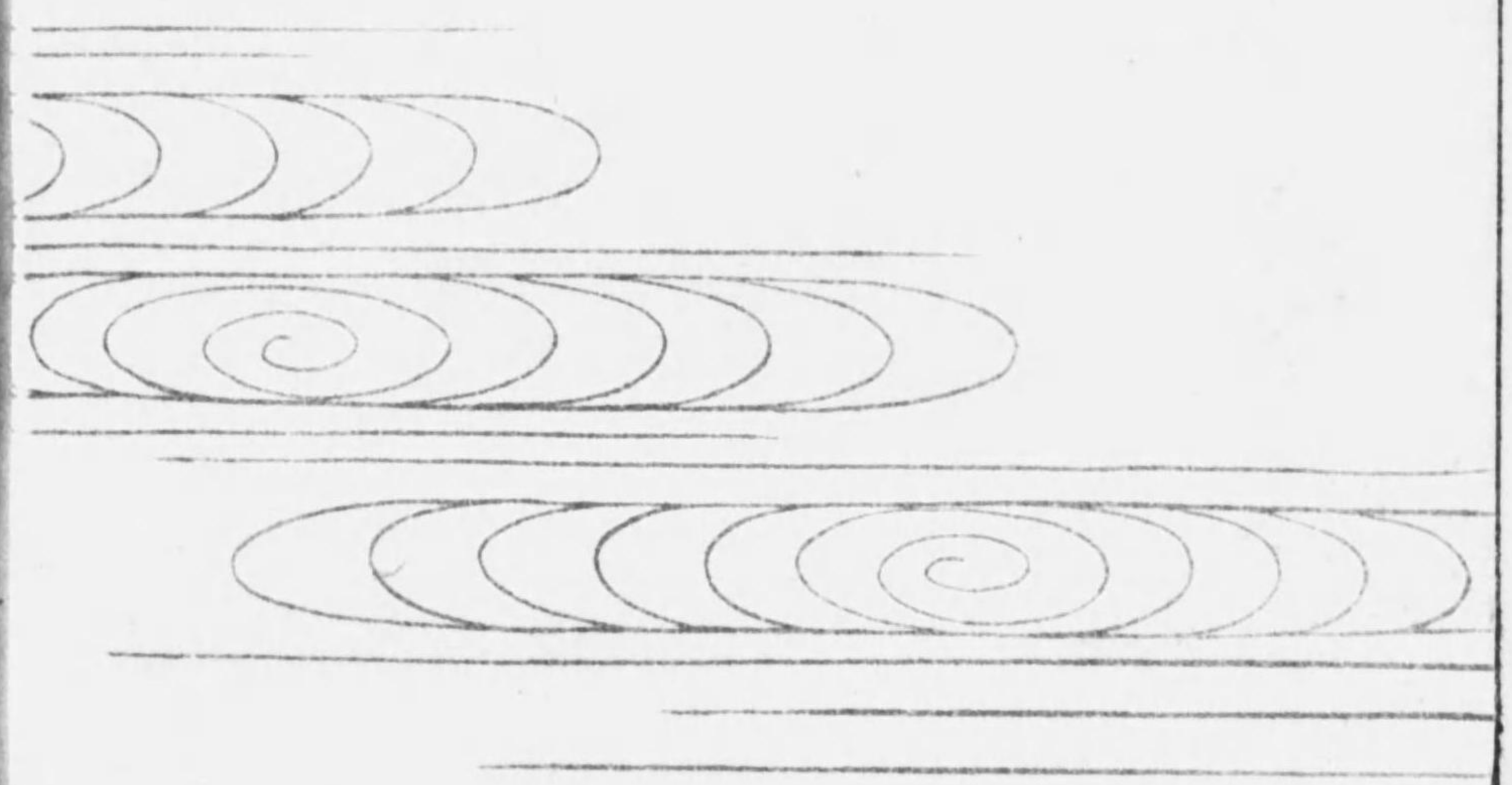
別五



始



第 258  
421



## 雨 月

■竹氏信作

曲 柄 四番目(略初節)  
季 節 八 月  
種 古 順 準九番習  
所 攝津國大原市住吉

### 梗概

嵯峨の奥に閑居せし西行法師(ワキ)住吉明神に詣でんとて、やがてかの地に到り、釣殿のあたりなる庵に立ち寄り、一夜の宿を求むれば、老人夫婦(シテ、ツレ)あり、姥は月をめでて板間漏る影を遮るも惜しみて、軒を葺かじといひ、翁は秋の村雨を好みて、木の葉を誘ふ嵐の音までも雨によそへて、軒端を葺かんといひ、互に雨月の二つを争ひ、圖らず「賤が軒端を葺きぞわづらふ」と歌の下の句を得たれば、この上の句をつがせ給はゞ、お宿参らせんといふ。西行もとより好む道なれば、「月は漏れ雨はたまれととにかくに」とつく。老人夫婦喜びて内に入れ、夜も更けたれば、いざ休み給へ、われも眠らんといひて立ち去りぬ。(中入)

やがて住吉明神、宮人(後シテ)にのり移りて、和歌の道を説きて西行の歌道執心をめで、舞を奏し給ひたる後、神託を疑ふなといひて神あがりし給へば、宮人はもとの身になりて本宅に歸りぬ。

### 謡ひ方

雨と月とを争ふ、物語を骨子としたる、現在物にて、後は蟻通に似たる、四番目にて、時としては初能に用ゆ、神祇物の様な處もあり、寂びたる澁き曲なり、軽からざる曲にて、老功者に非れば勤め難きものなり。

△シテ 出は位を取り、閑かに寛たりと謡ひ出し「餘りに」のはりを内へ取り、ワキとの掛合は穩やかに「去りながら」とツレと調子を合せ、落着いて「祖父は」と閑かに「賤が軒端を」と何心なく一句謡ひて、少し間を取り氣附し心にて次の「賤が軒端を」と考へる心にして、閑かに中音にて繰返し、「面白や」と氣を變へ抑へぬに出で「この上の句を」とはつきりと、ワキの後の「賤が軒端を」とワキと別に出し「月は漏れ」とワキとの連吟はしつとりと「面白の言の葉や」と拍子に合ふなれば、改めてさらりと附け「けに村雨の」と内へ取りてしんみりと「軒端の松に」と互に詰め「時雨せぬ夜も」と上端の心にて、稍引立て、「早夜も更たり」と前と氣を變へ、はつきりと閑かに「こゝはもとより」とかゝつてしつくりと、充分

に閉め「我も」と抑へてたつぷりと誦ふ。

△後シテ 宮人と雖も住吉の神の移り給ひしなれば、壯麗に爽やかに誦ひ出し「我を誰とか思ふ」と引立て、壯重に「神託まささ」と抑へてたつぷりと「疑はざれ」と閉め「抑此神の」と氣を變へ、閉かに運びを附け「謹上」を改めて大きく誦ふ。

△ツレ 姥なれば、餘りさら／＼と若く誦はず「なうなうこれは」とさらりと、シテよりは上吟に、シテとの連吟はシテの調子に従ひ、以下シテとの掛合はさらりと誦ふ。

△ワキ 西行法師なれば、稍位を取り次第を誦ひ出し、名乗は確かりと、道行は伸んびりと「急候程に」と氣を變へ寛たりと、シテ又はツレとの掛合は、さらりめに「月は漏れ」と少し間を取りて誦ひ、シテとの連吟は、シテの調子に従ふべし。  
△地 「けに理も」とシテの位を受けてさらりめに附け「折しも秋半ば」と閉かに朗かに「秋の空」とゆるめ「雨は又瀟湘の」と心持を附けしつぷりと「雨にてはなかりけり」とかゝつて引立て、さらりと「閨の軒端の松の風」とゆるめ「こゝは住吉の」と元へ戻し、返しの「いざ／＼礎うたうよ」と閉め「うき世の業を」と氣を變へ、以下運び能く「木の葉の雨の」と朗かに引立て、品よく「老衰の眠り」と極閑かに重んもりと、中人前をとくと閉め、後の「現はれ出でし」と閉かにたつ

集に、「わがものと秋の梢を思ふかな小倉の野邊に家居せしより」とあるは此處なり。

住吉の明神 — 攝津國住吉郡にあり。現今は大阪市に編入さる。昔より世俗に和歌の神と崇めらる。

住の江 — 住吉の古名。

風枯木を吹けば云々 — 白氏文集第二十卷に載す、白居易の詩、江樓夕望招客、「海天東望夕茫茫、山勢川形瀾復長、燈火萬家城四畔、星河一道水中央、風吹枯木晴天雨、月照平沙夏夜霜、能就江樓銷暑否、比君子舍較清涼」とあり。風に枯木の咽ぶ聲は晴れの空にも雨の降ると聞え、月の平々たる砂を照す時は、夏の夜も霜のおけると覺ゆとの心を表したる句なり。又文集十九卷に載す詩に、「風生竹夜窓間臥、月照松時臺上行」との句あり。即ち窓近き竹の林に風そよぐ夜窓の間に臥し、松の木の間より月の洩り来る折臺上に佇みありくとの心。共に同一の意なり。

三五夜中新月の云々 — 白氏文集第十四卷に載す、白居易の詩、八月十五日夜禁中獨直對月憶元九、「銀燭金蘭夕沈々、獨宿相思在翰林、三五夜中新月色、二千里外故人心、渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深、猶恐清光不共見、江陵卑濕足秋陰」とあり。即ち白樂天八月十五日、月の明き夜禁中に宿直して文友元稹を思ひて此詩を作り、我今夜明月を見る

ぶりと「住吉の」と能く納め「再拜」と眞の序之舞にかゝる處なれば、充分に閉めて「ありがたの影向や」と氣を變へ改めて爽やかに、神々しく段々と晴れ晴れしく誦ひ納むべし。

能の異式 (小書)

長序之勅 — 眞の序が替る。

二度之返 — 「月は洩れ」の歌を繰返し吟じ感心するなり。

語釋

雨月 — 西行法師住吉に參詣して奇特に逢ふ。撰集抄に「治承二年長月の頃、或聖と伴ひて西國へ赴きしに、さしていづくともなきまゝに、日の傾くにも急がずして、江口、桂本などいふ遊女が住家見めぐれば、家は南北の岸にさしはさみて(中略) 其里を過ぎなんとするに、冬を待ちえす村時雨のはけしくて、人の門に立ち休らひて、内を見入れ侍るに、主の尼の時雨の洩りけるをわびて、板を一ひら提けてあちこち走りありきしかば、何となくかく「賤がふせやを葺きぞわづらふ」と打ちささみたるに、此の尼さばかり物さわがしく走りありつるが、何とか聞きけん、板を投げすて、月はもれ雨はたまれと思ふには」とつけ侍りき」云々とあるに材を取りて作曲せし故雨月といふなるべし。

嵯峨 — 山城國京都市嵐山附近の地名、現今の嵯峨町。西行庵の跡は二尊院と妓王寺との間にありしと云ふ。西行の山家

につきて遙かに隔てたる親友の心も思ひやらるゝと幽玄の意を表したるなり。

雨は又瀟湘の — 瀟湘八景に瀟湘夜雨あり。

遠里小野 — 住吉の南十二町。今俗にをりをの村といふ。

秋風の軒端の松 — 玉葉集に載す、永福門院の歌に、「秋風は軒端の松をしをる夜に月は雲井をのどかにぞゆく」とあり。時雨せぬ夜も — 後拾遺集に載す、源賴實の歌に、「木の葉ちる宿は聞き分くことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も」とあり。

津守 — 住吉の浦の名。

老衰の云々 — 聖徳太子傳曆備講に、「昔明惠上人行路頭にて、春日住吉に逢ひ給ふ。春日明神は壯盛肥滿の貌、住吉明神は老衰悴瘠の容なり。上人其故を問ひ給ふ。住吉對へて曰く、春日は且夕に恒時の法味を受食し給ふ故に、色力壯層の體を顯し給ふ。住吉は晝夜海濱の波濤に押れて、松風の颯然たるを聞くのみ。此の故に瘦せ疲れ、白翁の相あり」とあるを引用す。

西の海青木が原の — 續古今集に載す、卜部兼直の歌に、「西の海やあをきが原の潮路よりあらはれ出でし住吉の神」とあるを引く。

因位 — 未だ佛果を得ざる菩薩の地位をいふ。此處にては前

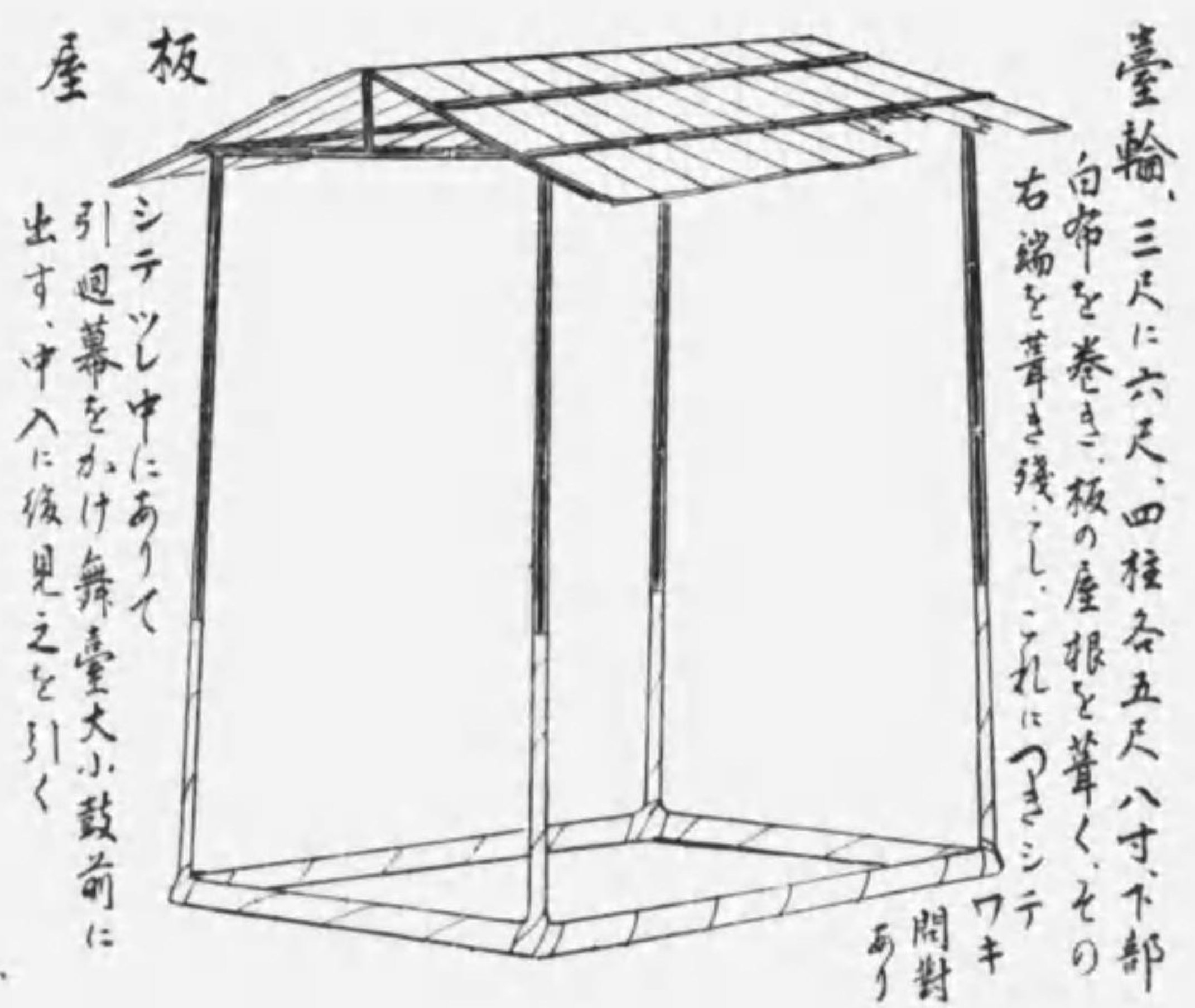
身などの意なるべし。

岸うつ波も一後拾遺集に載す、惠慶法師の歌に、「松風も岸うつ波も諸共にむかしにあらぬ聲のするかな」とあるを引く。

間狂言

住吉明神の末社。

斯様に罷り出でたる者は。攝州津守の浦住吉大明神に仕へ申す神にて候。去程に珍しからぬ御事なれど。先づ我朝は天地開闢より神國なれば。靈神數多在すと云へども中にも此住吉大明神と申し奉るは。昔神功皇后當社諸共に異國の戎を平け給ひ。鬼神高麗契丹國迄も悉く日本に靡き従ひ。今に國土豊かに御座す事も。偏に當社の御神徳なるにより。即ち四所明神と顯れ給ひ。吾朝安全の守護神にて。就中歌道を専らに守り給ふ故。和歌の道は古へ今に至る迄猶彌増しに榮え行くとは言へど。三十一字の言の葉を連ぬる程の人は別して住吉玉津島に歩みを運び給ふ。それに付き人皇七十四代の帝。鳥羽院の北面の侍佐藤兵衛憲清と言ひし人。浮世を厭はん爲に元結を切り名を西行と言へる歌人。年月當社への信心深きにより參詣申さるれば。明神の御受納料ならずして。釣殿の邊りの御神木の松の下に柴の庵を結び。老人夫婦と現じ給ふを。西行は立寄り一夜の宿を乞はるれば。内よりも御は安き間の事去りながら。此處に兩人の者争ひのありて此庵の屋根成就



致さぬ。其の仔細は。祖母は月を見うする程に葺かじと言ひ。又祖父は雨の音聞かん爲に葺かうと申す。此論に付き歌の下の句を思出した則ち其歌は。賤が軒端を葺きて煩らぶとある。此上の句を旅人の御糶ぎあるに於ては。御宿は惜しみ申すまじき由仰せらるれば。其時修行者心に思はるゝ様。是は雨月の二つを争ふ心なりと思ふ折しも。頃は秋の半ばの事なれば。月は洩れ雨は溜れど兎に角に。と斯様に申さるゝを明神は聞し召し。あら面白の深き言の葉や。左様に月を思ひ雨を厭はぬ人ならば御宿りあれとて内へ請じ入れ。賤の營む業なればとて終夜月を詠め。衣打つ體をまなび給ひ。早や夜も深更になり鳥の聲納れば。御休みあれ我も共に眠らんと言ひ捨て。其儘御歸りなさるゝ。さて彼の旅人への御馳走には。舞樂をなして慰め給はんとその御事に依り。取る物も取り敢へず罷り出た。急いで相觸れ申さうする。やあゝ皆々承り候へ。當社住吉大明神は。今度は宜禰が頭に移り在て。旅人を慰め給はんとその御事なれば。構へて其分心得候へ〜。

作 物	後 シ テ 宮 人	ツ レ 礎	前 シ テ 厨	ワ キ 西 行 法 師	装 束 附 (雨月)
	大板屋幣	面、皺尉又ハ小牛尉 白垂 翁烏帽子 白鉢巻 襟淺黄 着附小格子 白大口 縹狩衣 繡紋腰帶 神扇	面、姥 鬘 姥髮 無紅鬘帶 襟萌黄 着附摺箔 無紅唐織 縹水衣	面、小牛尉 尉髮 襟淺黄 着附小格子又ハ無地駝斗目 茶水衣 緞子腰帶 尉扇	

# 雨月

素謡座席唄

ワシツキテレ



ワキ僧上  
次才ヨク  
拍子二合

心を誘ふ雲水の心を誘ふ雲水の  
行方やいづくなるらん  
これは嵯峨

の奥に住居する西行法師にていわれ

宿願の子細あるにより唯今住吉の

明神に冬詣住りの住み馴れ

嵯峨野の奥を立ち出で嵯峨野の

奥を立ち出でて。西より西の秋の  
 空。月を行方の知るべにて。難波の  
 津の浦傳ひ入りぬる磯を過ぎ  
 行けばはや住の江に。着きにけり  
 はや住の江に着きにけり。急ぎの程  
 に。これははや住吉に着きてのわれ  
 この所に來りてか。ことをさすらひ



風を吹くは

三子尉上

ツクハ

立ち寄り宿を借らばやと思ひの  
 風枯木を吹けば晴天の雨。月平沙を  
 照らせば夏の夜の霜。これさへあるに  
 秋の空餘りに堪へぬ半ばの月。あら

面白のなりからやな早詞 確カリしかにこの家の  
 内へ案内申しゆシテ誰にて渡りゆを  
 行き暮れたる修行者にてゆワキ一夜の  
 宿を御貸しゆシテ餘りに見苦しき  
 柴の庵にてゆ程にお宿は叶ひゆまじ。  
 今少しさきへ御通りゆシテなうなう  
 これは世を捨人痛はしければ入らせ

給へツレテなから秋にもなれば夫婦  
 の春月をも思ひ雨をも待つ心々に  
 葺き葺かて住める軒端の草の庵  
 いづくにありて留まり給ふべきワキこそ  
 は雨月の二つを争ふ心なるべし。月はい  
 づれぞ雨はいかにツレ上姥はもとより月に  
 愛で。板間も惜しと軒を葺かす



祖父は秋の村時雨木の葉を誘ふ  
 嵐までも音づれなとて軒端葺く  
 がこは月影こは村雨定めなき  
 身の住居までも 賤が軒端を葺  
 きぞわづらよ 賤が軒端を葺きぞ  
 わづらよ 面白や即ち歌の下の句  
 なりこの上の句をつがせ給は お宿は

惜し又申すまじ 月もさうわれも和  
 歌の心その理を思ひ出づる。月は漏  
 れ雨はたまれとどにかくに 賤が軒  
 端を葺きぞわづらよ 月は漏れ雨  
 はたまれとどにかくに 賤が軒端を葺  
 きぞわづらよ 面白の言の葉や げに  
 理も深き夜の月をも思ひ雨をさへ

○小謡  
上歌



厭はぬ人ならば。こなたへ入らせ給へ。お  
 折しも秋なかは。折しも秋なかは。  
 三五夜中の新月の。二千里の外まで  
 も。心知らる。秋の空。雨は又。瀟湘  
 の夜。のあはれぞ思はる。なう村雨の  
 聞え。げに村雨の。聞ゆるぞや。遠  
 里小野の。嵐やらん。よよく聞けば

○獨吟  
○仕舞



時雨ならで。更け行くま。は秋風の  
 軒端の松に。吹き来るぞや。雨に  
 てはなかりけり。小夜の嵐の。吹き落  
 ちてなかな。か空は佳吉の。所からなる  
 月をも見。雨をも聞けと。吹く。園の  
 軒端の松の。風。こは佳吉の。岸おつ  
 波も程近し。假寝の夢も。いかならん。



あつても旅枕さらでも夢はよも  
あつてもいざいざ礎持たうよいざいざ  
礎持たうよいざいざ  
礎持たうよいざいざ



風寒しとして夜うつ身の為はさも  
あらで秋の恨みの小夜衣月見がて  
らに擣たうよ  
す 木の葉の雨の音づれに老の



涙もいと深き心を滌めて色々の木の  
葉衣の袖の上。露をも宿す月影  
に重ねて落つるもみぢら葉の色に  
も交る塵ひぢらの積る木の葉を  
かき集め雨の名残と思はん。はや

夜も更けたり旅人も御休みゆへ  
らにはもとより所から年も津守の



小尉なればわれも同上老衰の眠り  
深き夢にかへる古をヤサ松が根枕し  
て共にいさやまどろまん中入來序間

後ニ宮人上

出端



あら面白の詠吟やな陰陽二つの  
道を守るその句を分つて五體と  
す木火土金水なり上下は即ち天地  
人の三才はこれ詠吟なるべしわれを



は誰とか思ふ忝くも西の海憶が  
原の波間より地ニテ元ヌ現れ出でし住よし  
の神託まさに疑はざれ祝詞中そも  
そもこの神の因位を尋ね奉るに  
昔は都率の内院にして高貴徳  
王菩薩と號し今は又玉垣の  
内の國に跡を垂れ和歌を守りて



住の江や松林のももに住んで久しく  
 風霜を送る。そに和歌の人稀なる  
 處に。西行法師歩みを運び給ひ。心  
 を述ぶる和歌の友とて。神明納受  
 垂れ給ふ。これによつて神慮の程  
 を知らしめんと。宜禰が頭に乗り  
 うつる。謹上

再拜

眞之序之舞  
 井上打切



○仕舞

同上



ありがたの影向や。ありがたの影向  
 や。返す心も住吉の岸うつ波も  
 松風も。楓々の鈴の聲。ていつらの  
 鼓の音。和歌の詠吟舞の袂も  
 同く。心詞にあらはる。その風  
 等。かりけり。されまでなりや。今  
 ははや疑はで。神託を仰ぐべしと

雨月

冬



本綿四手の神はあからせ給ひけれ  
 ばもとの宮人となりて本宅に帰  
 りけりやもとの方に帰りけり。

## 土車

世阿彌元清作

曲 四番目(略二番目)  
 季 不定  
 所 信濃國長野市善光寺

### 梗概

深草少將(ツキ)は妻に死別してより世をはかなみ、一子を捨てて出家し、信濃國善光寺に参りぬ。傳小次郎(シテ)は母には死して別れ父には生きて離れたる養君(子方)の上をあはれみ、さも見苦しき土車に乗せて、かなたこなた少將の行方を尋ねける間に、心も亂れしが、なほも養君をいたはりつつ、やがて善光寺に辿り着き、佛前に詣でて父御との對面を祈りぬ。少將そのわが子と傳なるに氣つき、父と名乗り主と告げて喜ばせんと思ひしが、三界の絆をこゝにて切るこそ出家の道なれと思ひ返し、さあらぬ態にて行き過ぎぬ。小次郎はこゝまで尋ね来れども、少將に似たる人さへなきに、終に思ひ諦め、さらば川へ御供せんといふ。二人は既に川に近づきたり。少將は一旦は思ひ切りたれど、また引き返し見れば、二人は將に身を投げんとせるに驚きて、急ぎこれを引き留め、父よと名乗り、父子の再會を遂げけり。

### 謡ひ方

男物狂は高野物狂と共に二曲のみなり、傳の若君に對する情と、父を尋ねあぐみたる兒との、身を捨てんとする情緒纏綿たる、心持を現はすには、寫實に過ぎぬ様に心掛け、凡て女物狂の如く、細き情を現はすは宜しからず、心持緩急多く能く心して謡ふべし。

△シテ 餘り位を取らず、一聲は引立てて伸んびりと謡ひ出し、「これに御入り候は」と氣を變へ「あら笑止や」と改めて出し「あらいとほしや」と氣を掛け穩やかに「痛はしや」と氣を掛け閑かに「諸佛念衆生」と改めて別に出で殊勝に「住まで世に經る」と、子方と連吟にて調子を改め、下音にて閑かに「悲しきかなや」以下しつとりと「念佛申し」下歌は改めて閑かに「何と天が下に」とかかつて氣を掛け、確かりと「土も木も」とたつぷりと朗らかに「殊更當國」と上端の心にて伸んびりと「阿彌陀佛」と引立てて「いかに申候」以下子方との掛合は落着いてしつくりと、サシはすらりと「さればにや其心」と調子高くならぬ様にさらりと「思ひ切たる」と氣を掛け「す

は早川も」と確かりと「ありてうければ」とさらりと「更に誠と」とかかつてさらりと誦ふ。

△子方 さらりと誦ふ、シテとの連吟はシテの調子に附かず、一段高く誦ふ、緩急は合せて、離れぬ様に誦ふべし。

△ワキ 深草の少將と雖も餘り位を取らず、閑かに次第を論ひ出し、名乗は高くならぬ様に「不思議の事の候」と調子を内へ取り「あら不便と」と心持を附け控へ目に「やがて名乗つて」とさらりと「や」と一寸間を取り「あら何ともなや」と

はつきりと「思ひ切りたる」と氣を掛けはつきりと「誠に三界の」と確かりと「あゝ暫しとて」とかかつて手強き心にて「今は何をか」とかけて少しゆるめ「深草の」と確かに地へ渡す。

△地 初め地はさらりと受け「袖を廣げ」とゆるめ「心を人の」と少し引立てて「この歌の理りに」とさらりと受け「一天四海波を」と引立てて「木曾の棧橋」より晴れやかに「阿彌陀佛」より引立ててさらりと「ここにて切ると」と少しゆるめ、

クリは氣を變へさらりと、サシは閑かに運んで、クセはさらりと、上端は淀まず「葉末の露の」と氣の抜けぬ様にさらりと受け「又もや父に」とゆるめ「共に命の」より、切は氣を變へ引立てて、晴れやかに誦ひ納むべし。

語釋

土車 — 通世せし父君の行方を尋ぬるため、土車を挽きつゝ

るもの、宜旨を蒙つて彼國に下り一首の歌を詠みて、鬼の中へぞおくりける。「草も木も我大君の國なれば何か鬼の住家なるべき」四つの鬼の歌を見て、さては我等惡逆無道の臣に随つて、善政有徳の君を背き奉りける事、天罰通るゝ處なかりけりとして、忽に四方に去つて失せにければ、千方勢ひを失ひて、やがて友雄に討たれにけり」とあるをいふ。  
他の力 — 念佛の力のこと。  
振鼓 — 舞人の手に持つもの。

生死輪廻 — 生死の苦界に心の迷ふこと。即ち生死とは、生、老、病、死の四相のうち、前後を擧げて中略したるものにて、迷へる衆生の受くる苦の果報なり。これに分段、變易の二生死あり。分々段々に展轉生死するは前者にて、凡夫の受くるところのものなり。後者の變易生死は、菩薩の進んで煩惱を斷する毎に受くるところのものなり。さればこの生死界に於て、頭迷の衆生は、恰も水の流れ、車の轉するが如く、自己の業力に因りて生死の迷界を展轉循環して止まざる故に生死輪廻といふ。涅槃經に、「生死とは、生老病死の約、迷界の苦報なり。涅槃とは、滅度と譯して、生死を出離したる悟境なり。而して此二者、互に相容れざるが如きも、而も眞如實相の上より之を見れば、生死を離れて涅槃なく、涅槃を離れて生死なし」と示してある。故に指要鈔に、「若離三道即無三

忠僕孝子の途に廻り逢ふことを作りし曲なれば斯くいふ。善光寺への望み — 信濃國善光寺參詣の希望。

有明のつれなく — 古今集第十三卷、戀歌三に載す、壬生忠岑の歌、「有明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし」とあり。歌意は、有明の月が夜の明けるのもよそよそしく知らぬ顔で、空にあると同様に、人の氣強く見えた彼の一別以來で、今は世に曉ほど憂いものはないとの意。めのと — 若君の養育を依託せられし從者。

諸佛念衆生 — 諸佛は常に衆生を護念すると雖も、衆生は其恩徳を知らずして、敢て諸佛を想念することを爲さずとの意なり。即ち親は子を思ふも、子は親を思はずといふ事なり。深草 — 山城國京都市の南部。

如來堂 — 善光寺の本堂をさす。

千方と云ひし逆臣ありしが云々 — 太平記第十六卷、日本朝敵の事に、「天智天皇の御宇に藤原千方と云ふものあつて、金鬼、風鬼、水鬼、隱形鬼といふ四つの鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして矢を射るに立たず、風鬼は大風を吹かせて敵城を吹き破る、水鬼は洪水を流して敵を陸地に溺らす、隱形鬼は其形を隠して俄に敵を拉ぐ。斯くの如くの神變、凡夫の智力を以て防ぐべきにあらざれば、伊勢伊賀の兩國これがために妨げられて王化に順ふものなし。こゝに紀友雄といひけ

徳如煩惱即菩提生死即涅槃」とあり。三道とは惑、業、苦をいふ。三徳とは、法身、般若、解脱をさす。

有相執着 — 迷の一念より現象を實在と思ひて、心の囚へらるゝを云ふ。即ち人の五官にて感知する所の事物を、實在なりと認めて、これに心を寄せ氣を奪はるゝを云ふ。これに反し其愛惜の念を離れ、一切萬象の形體、姿勢の差別執を滅却し、本來空なる所以を悟るを、有相を滅すといふに依つて知るべし。

昇沈不定にして — 浮沈常なきこと鳥の木の枝を昇降するに譬へていふ。

見佛聞法 — 目には柔軟大悲佛身を拜し、耳には無上微妙の教法を聞くこと。

破戒 — 佛教の戒律に背くこと。

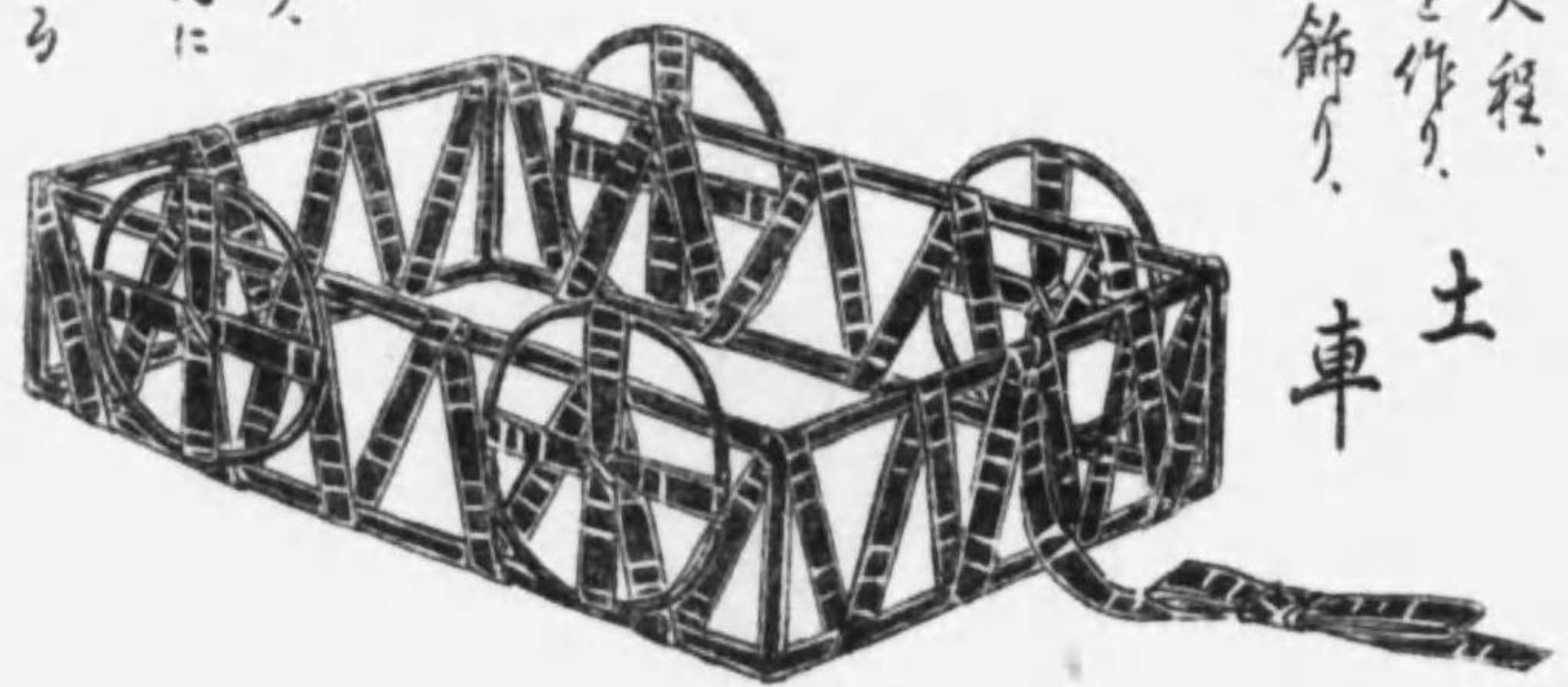
闍提 — 佛法不信の惡徒のこと。具には、(Tchavika・イチチャ、シチカ)といふ。譯して信不具と名づく。南本涅槃經に、「一闍名信提名不信、信不具故名一闍提」といへり。即ち佛法を誹謗し、因果の理法を信せざるものこれなり。この者は信を具せざるを以て、一切の善根を燒失して、永く生死界に流轉して出期なしと示せり。

問狂言

善光寺の能力。

これへ物狂が参つた。急いで狂ひ候へ。狂はずば内陣へは叶ふまいぞ(しやう)如何にこれなる狂女。面白う狂ふなればこそ狂へとはいへ。急いで狂ふて見せ候へ(しやう)さては狂ふまじきか。近頃憎き事を申すものかな。狂はずはこの如來堂の事は申すに及ばず。天が下には叶ふまじいぞ。急いで出で候へ。○さればこそ物に狂ふ。見物致さう。

二尺二寸中に四尺程、高ッ六寸程の料を作り、紺の香綴を以つて飾り、四輪を設け、引綱を付し、之を土車とす、ワキ座につけば、後見橋懸りの中程に出す、子方出て之に乗りシテ出で引綱を把り前方に立ち車を引く所作等ありシテ子方舞臺内に入りて後、後見とり去る



土車

作 物	シ	子	ワ	装 束 附 (土車)
	テ 小乳 次郎父	方 深草少将 子	キ 深草少将 (僧)	
車	直面 襟淺黄 着附段鬘斗目 白大口 水衣 繡紋腰帶 男扇	襟赤 着附縫箔 稚兒袴 扇	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 扇	



# 土車

素謡座席順  
ワシキチ方

早僧上 夢の世なれば驚きて夢の世なれ  
次オ ば驚きて捨つるや現なるらん  
拍子ニ合

詞 かやうにゆ者は深草の少将がなれ  
確カニ



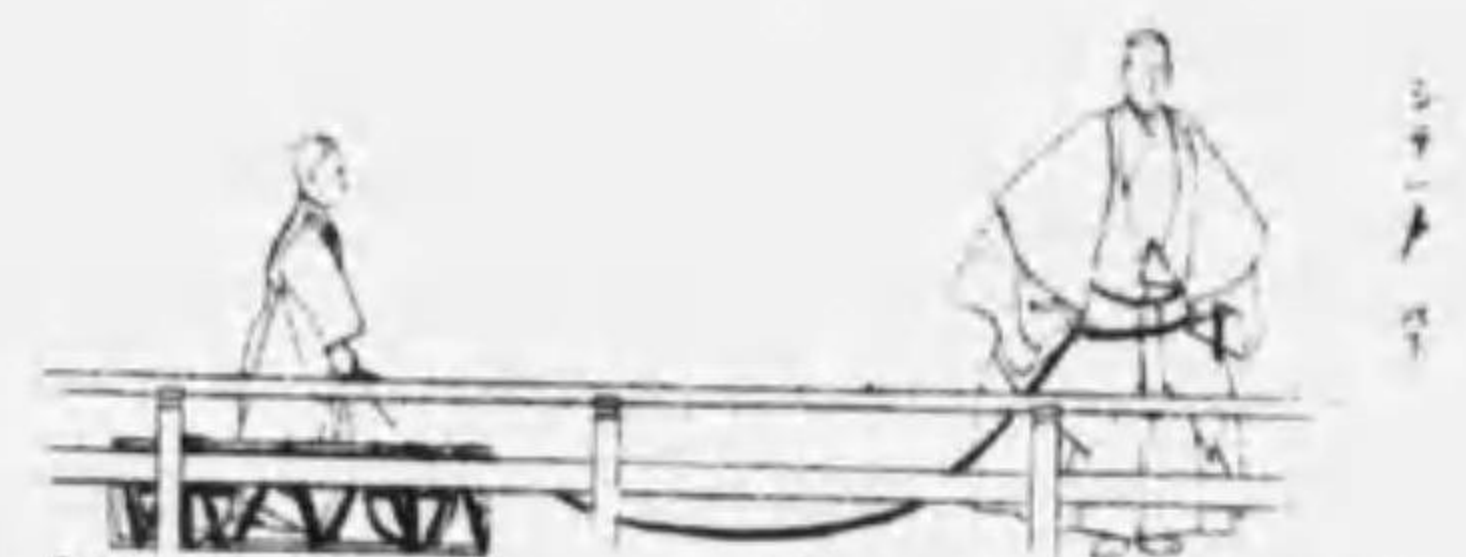
る果てにてゆ。われ妻に後れ。浮世  
 あらまきなくなり行きゆ程に。一子を  
 捨てかやうの次女となりてゆ。われ世に

ありし時より善光寺への望みに  
 て。この程は信濃の國にゆがけよ  
 も又序堂へ参らばやと思ひゆ  
 しかにあれなる道行人。善光寺への  
 道教へてたべ。なに物狂とやよし  
 さ思しめされんにつきては。なほ御  
 情は有明のつれなくも御通り

三男上  
 一声  
 拍まひ

詞

カル上



三  
 けものかな。これに御入りゆは主君  
 にて。逝在ゆが。父を失ひかな。たごな  
 たを御尋ねゆ。これを憐みて。たび  
 給へ。あら笑止や。又むつかりゆよ。い  
 いや。さやうに心弱くむつかりゆは。  
 けよ。よりしては。御供申すまづ。くゆ  
 しかに。めのと。けよ。よりしては。はく

子方



まじいぞとよシテあらいとほしやと  
 あらば何處までも御供申し父  
 御に逢はせ参らせゆべし。痛はしや  
 吉はイニシク鸞輿属車にカるされし御身  
 の名も高かりし日月もカ地に遠近  
 の土の車引きかへたる有様か  
 な。諸佛念衆生。衆生不念佛シテ

シテ二人  
 次身  
 拍子三合

住まで世にシテ經る土車。住まで世に  
 經る。土車めぐるや雨の浮雲

地上  
 子方サシ上  
 拍子三合

住まで世にシテふる土車住まで世に  
 經る土車めぐるや雨の浮雲  
 これは都のほとり深草の春にて  
 心が思ひの外ホカに父を失ひ諸國を廻  
 りひなりシテ悲しきかなや生死無常

の世の習ひ。一人に限らる事はなげ  
 れども。かなしみの母は空くなり。  
 残る父さへ。幾程なく。思ひの家を出  
 で給へば。その行き方を。白雪の跡  
 を尋ねて。迷ふなり。あはれやげに  
 古は。花鳥酒宴に。まとはされ。春秋  
 を送り。迎へし御身の。かくあさまし

○小謡



くなりぬれば。僅かなる露の命を  
 残さんと。念佛申し。鼓を打ち  
 袖をひろげ。物を乞ふ。心を人の  
 憐まば。心を人の憐まば。尋ぬる父  
 の行き方を。教へて。たはせ給へ。同  
 ふは果敢なき。憂き身ぞと。思ひ  
 ながら。も憂き旅を。信濃の國に

聞えたる善光寺にも着きにけり  
善光寺にも着きにけり。いかに

これなる狂人。面白う狂ひ入い

今は狂ひたうもなぐい。御身は

すねたる事を申す者かな。物狂

なれば狂へと申す。たゞ狂うて見

せ入い。やい。やい。狂ひひまじ。い



は狂ひまじか。近頃増き事



を申す者かな。狂ひまじかなら



ば。この如來堂にはまじきぞ。



急いで出でる。やい。やい。清堂はか

りは曲もなぐい。この國にはまじ

まじ。この國はかうはなほもやい

ひ。總じて天が下にやい。まじ。い。い。

三子詞 三子詞

何と天が下に叶ふまぎとふや恐  
 れながらおことの身とて天が下  
 に叶ふまぎとは思ひもよらぬ仰せ  
 かな。そのかみ天智天皇の御宇か  
 とよ。千方といひし逐臣ありしが  
 その身も勢ひありしよ。四つの鬼を  
 使ひしかば。攻むまぎやうもなかり

〇〇〇  
仕獨一  
舞吟調

〇小謡



一天四海波

一に藤原の朝臣一首の歌を書き  
 鬼の城に遣はすその歌に土も  
 木もわが大君の國なればいつか  
 鬼の宿と定めん 下歌同 この歌のこと  
 わりにこの歌のことわりに鬼も愛  
 でて去りぬれば千方も亡びひて  
 一天四海波をうち治め給へば國も



道徳にあらぬ人



徳にあらぬ人



徳にあらぬ人

動かぬあらねの。土の車のわれら  
 まで。道せばからぬ大君の。清影の  
 國なるをば。獨りせかせ給ふか。  
 殊更當國信濃路や。木曾の棧道  
 かけてげに。頼みも危からぬ。法の聲  
 立てなほ。諸人の憐み他の力。波  
 らさぐもものを。彌陀佛の。清影もあ



このお佛をよむ



たはれ給へ

まねく憐ませ給へんが。憐みの中に  
 もこのお佛ぞよなき。佛は衆生を  
 一子と思しめさるれば。殊更われら  
 が影頼み頼む中にも。彌陀は母に  
 てまゝませば。父にも逢はせてた  
 ばせ給へなまみだ。阿彌陀佛  
 阿彌陀佛。歌と舞の菩薩聲が。



花のあり鼓筆葉の笛和琴聲  
 を上げて叫ぶも父とも答へずあ  
 はれとだにも知らざればやうそれ  
 までぞとらも八撥をもどうち捨て  
 て狂はじ皆うち捨てて狂はじ。

早詞  
 不思議の事のゆこれなる物狂を  
 いかなる者ぞと思ひてゆば吉里

に留め置きたる一子にてゆ又こなた  
 なるは傳のふ次郎にてゆあらず  
 便と衰へてゆやがて名乗つて  
 悦ばせばやと思ひゆやあらず何とも  
 なや一度思ひ切りたる道に又輪  
 廻の心の出で来てゆはいかに今逢  
 ひ見たらば終の別れ今逢ひ見ずは





ミテ詞 ミテカハ開カニ

終ツヒの悦ヨロコブび。真マコトに三ミ界カミの絆キナを同にて切キると思オモひなし。南ミナミ無ム阿ア彌ミ陀タ佛ブツと稱ナヅケへてさうらぬやうにて行ユクま過スぐるさうらぬやうにて行ユクま過スぐるしかに申マウしゆ。これまで父御チチノミコをば尋タシね参マツらせてゆども。父御チチノミコに似ニたる人ヒトさへ法ホウをななくゆ。さうして何ナニと依ヨりゆべき

子方コカタ

今は命イナヒも惜オソしからず。前マヘなる川カハに



身ミを投ナゲげ空ソラしくならばやと思オモひ

ゆげにげにげにけなげにも仰オホせゆも



のかた。さうらば御供ミツケ申し身ミを投ナゲげ

ゆべし。さうりとも善光寺ぜんくわうじにては尋タシね

逢アひ参マツらせうずると存ゾクじゆども。

今ははや某しんがれも退シノ屈ツク依ヨりてゆ。今

○サン曲獨吟

宵は如來の御前にて。御心靜か  
 に念佛を御申しゆへ。明けなば川  
 へ御供申しゆべし。これ生死輪廻  
 の根元を尋ぬるに。有相執著の  
 妄念より起れり。おのれと心に  
 迷うて流轉無窮にして。車の  
 場に廻るが如し。昇沈不定にしては

鳥の林に遊ぶに異ならず。悲し  
 きかなやわれら今。人界に生を受  
 くとはいひながら。見佛聞法の  
 結縁をもなごされば。未來の樂  
 しきも。いかごと思ひ。知られたり。

凡そ彌陀の悲願には。被戒圍提  
 をも減らす。一念十念の間。に彼の

國に迎へ取るべしと五劫思惟の本  
 願なりミテ上「さればにやその心同極重  
 悪人無地方方便唯稱彌陀得生極  
 樂と説かせ給へる。この理に任せつ  
 われらを助けおはしませわれらを  
 助けおはしませ。思ひ切つたる事  
 なれば。二人は手に手を取りはなし。



われらを助けおはしませ



なれば。二人は手に手を取りはなし。



思ひ切つたる事

川のほとりに立ち出づるワキ思ひ切り  
 たる事なれども。又引きかへす心地  
 して。前モンさうして遑トウうて行く



あゝ憂はす

ミテすははや川も近づきぬと。二人は西  
 に向ひ。既に憂ウき身を投げ  
 んとす。あワキ暫シバしとて引ヒき留トむる  
ミテありて憂ウければ捨スつる身を留トめ

給ふはなかなかに。われらが為には  
 憂まき人なり。今は何をか色むべ  
 き。これこそ父の少将よ。更に真  
 と白雪の古里の名は。深草の  
 葉末の露の消えもせで。命のあ  
 れば又父に逢ふこそ嬉しかりけれ。  
 あふ事のもし夢ならばいかにせ

○小謡



二時中あし車

現になり行かばまたもや父に  
 別れなん。とも命ながらへて。  
 又廻りあふ小車の別れし時の憂  
 き思ひ。今あふ事の嬉しさを。何に  
 たとへん。方も渚の波夜晝戀ひ  
 しわが父にあふこそ嬉しかりけれ。  
 あふこそ嬉しかりけれ。



あふこそ嬉しかりけれ



## 攝待

作者不詳

曲柄  
季節  
種古順

四番目(略三番目)  
三月

準九番目

岩城國信夫郡平野村佐場野

## 梗概

源義經(ツレ)は辨慶(ツキ)以下主従十二人作り山伏となりて、奥州に落ちけるに、佐藤の館に山伏攝待の高札を立てたりければ、さあらぬ態にて立ち寄りぬ。忠信の遺子鶴若(子方) 繼信忠信の母尼(シテ)はそれとさとりて喜び迎へ、母尼は二人の子を失ひし歎きを洩らして、せめてはわが君をそと教へ給へといふ。義經主従はとかくいひ通れんとせしが、終に二人の衷情をあはれみて、その名を告げ、辨慶はまた繼信が屋島の合戦に主君の命に代りて討たれし様、弟忠信がその場に兄の敵を討ちし事など語り聞かすれば、母は歎きの中にも喜びて、酒を勧め、鶴若もかひなくしく酌を取りて廻りぬ。さるほどに、夜もほの／＼と明け行けば、義經主従暇を告げ出でんとせしに、鶴若、われも御供せん、小さき兜巾襦袢をとく調へてたべといふに、辨慶涙を抑へてすかしなだめ、一同泣く／＼立ち別れ行けば、母尼は鶴若を抱きて跡に留りぬ。

## 謡ひ方

義經、陸奥落の安宅の後段とも見るべき物なれども、それは謡ひ方は全然異り、位も重く緩急極めて多し、確かりと謡ふと雖も、荒くなりては宜しからず、又淀んで謡ふと雖も、弱々しきは宜しからず、心持難き曲にして、能く心して謡ふべし。

△シテ 繼信、忠信の老母たる、女丈夫の面影を失はざる様に聲を充分に抑へ、淋しき内に根強く謡ひ出し、「かしましかしまし」とイロにて「舊里を出でし」と少々引立てる心にて、サシは氣を變へ抑へて閑かに、粘らぬ様に運び「御前に参りて」とゆるめ「これは故佐藤莊司」と改めて「けにや親子恩愛」と氣を變へクリの心にて、少しさらりと「嫡子繼信は」より別にクドキの心にて、粘らず着かず所々に心持あり「仰の如く」と確かりと「先づ唯今」と一寸間を取り、考へる心にて謡ひ出し、以下ツレとの掛合は文句に心付け、緩急心持多し、「この御聲こそ」と極閑かに重んもりと、段々と運んで「一人當千の」とかゝつて確かりと「あらありがたや候」と

かゝつてはつきりと「いかに申上候」と慎ましく「さて其時に」とかゝつてすらりと「扱は敵も大將に」と稍確かりと、以下ワキとの掛合は閑かに確かりめに「それは仰迄も」と氣を變へしつとりと「母は思ひに」とロンギの心にて、少し引立てる心にて「そも御供とは」とかゝつて穩やかに「老尼は鶴若を」と充分に抑へて、極閑かに淋しく語ふ。

△ツレ判官 始の次第並に上歌は論はず、凡て品位を保ち凛々しく、はき／＼と語ふ「暫く候」とかゝつて、何事なくさらりと、「いかに辨慶より」威を込めさらりと語ふ。

△ツレ兼房 一の老體なればさらりと語ふなれど、其心持あるべし。

△ツレ鷺尾 兼房よりは輕めに語ふ。

△子方鶴若 此子方は素語にても能にても大役なり、されど心持を附けるは悪しく、總じて調子を高く取りさらりと「疑もなき我君よ」と確かりと「鶴若酌に」と拍子に合ふ所なれば、心得て語ふべし。

△ワキ 總じて充分に落着を持ち、荒々しくならぬ様に、次第はたつぷりと語ひ出し、上歌は氣の抜けぬ様に、確かりとさらりと「いかに申候」とどつしりと、以下兼房との掛合は確かりと「これなる幼き人は」子方との掛合は何氣なくさらりと「さればこそ御大事」と氣を變へ重んちり目に「これは

調子を受けて、充分に抑へてしつとりと、閑かに語ひ納むべし。

語釋

攝待 — 義經の奥州へ落ち行く一行が佐藤の館にて攝待に逢ひ、君臣の名乗をし、佐藤繼信戦死の狀を母子の前に物語ることを作曲せしものなる故かくいふ。

子に臥し實に起きなれて — 山伏は子の刻に臥して寅の刻に起くる法なることをいふ。子は夜の十二時、寅は午前四時なり。

松島 — 陸前國宮城郡、日本三景の一たる勝地。

佐藤の館 — 佐藤繼信の邸、陸奥國信夫郡。

山伏攝待 — 供養のため山伏を變應すること。

佐藤繼信 — 三郎と稱す。

八島 — 讃岐國木田郡、屋島とも書く。

舊里を出てし鶴の子の云々 — 繼信兄弟の故郷を立ち出でしまゝにて遂に歸らず討死せしことを譬ふ。支那の昔に丁令威といふ人、鶴に化して千歳の後、家に歸りしといふ古事あるに依る。朗詠集、鶴に載す、神仙策、都良香の文中にある句「鶴歸舊里」丁令威之詞可聽、龍迎新儀、陶安公之鶴在眼」とあり。是は本朝文粹第三卷にある神仙を題にて作れる文なり。晋の哀帝の時丁令威といふ人あり。仙を得て山に入りて

思ひもよらぬ事を」と心持を持たずにすらりと「さてこう申す山伏を」と重んちり」と「今は何をか隠し」と改めてどつしりと、判官との問答は慎ましく「御説と申し」と改めて朗かに、語は充分に氣を込めて語ひ出し、文句に付き緩急あり、心持あり、能く宋注を見て大事に扱ふべし、終の「なんほう面目もなき」と調子を控へて閑め「あら愚や忠信は」とかけて大きく、次の語は前よりもさらりめに、はき／＼したる所あるべし、以下シテとの掛合は語りの心にて「餘所の歎きを」と閑かに慰めの心にて「辨慶涙を」と内へ取りて重んちり」と以下子方との掛合、調子高くならぬ様に語ふ。

△地 「空しくなりし」としつとりと附け「親子よりも主従は」と調子控へて閑かに「一人は母。一人は子なり」と心持あり「武士も」とかゝつて氣を込めて出でさらりと「餘所目も」より段々と閑め「父給へのうとて」と氣の抜けぬ様にすかりと受けて、以下さらりと「泣く泣く膝に」と閑め「けにや梅檀は」と改めて出でさらりと「十二人の山伏の」と閑かに受け、クセは閑かに出で沈まず、粘らぬ様にさらりめに、上端は稍靜かに「果ぞ悲しき」と閑め「十二人の山伏の」と引立て「さらりと」とぞ思ふ」と強吟と變る所、態とならぬ様に「去る程に」と氣を變へさらりと「面々聲々に」閑かにしつとりと「折を得て寄僧は」よりさらりめに「行くは慰む」とシテの

歸らず。後に千歳を経て白鶴となり、舊里に歸り來りたる心を作れるなり。下旬の陶安公は並びなき鑄冶師なり。其妙技天に通じたれば七月七日赤龍を下して此人を迎へけり。これを迎新儀といふ。陶安公忽ちに仙を得て、彼龍に乗つて飛び去りけり。即ち陶安公の乗物も目前にあることなれば、神仙といふことは眞なり、偽りならずとの心なり。されば討死せし繼信も眞なりしかといふ意。

故佐藤庄司 — 名は元治、信夫の庄司にて湯庄司と稱せり。

忠信 — 繼信の弟、文治元年義經の吉野山にて空腹切りて逃けたるが、翌年京都にて精谷有季の兵に圍まれ遂に自殺せり。

身を知る雨の — 古今集第十四卷、戀歌四に載す、在原業平の歌、詞書に、「藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女をあひしりてふみ遣はせりけることばに「いままうでく雨のふりけるをなむ見わづらひ侍る」といへりけるを聞きて女にかはりてよめる」として、「かす／＼に思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」とあり。歌意は、種々に親切にいられるが、誠に思ふやら思はぬやら御心の中が問ひ難いので心配して居たが、幸に私の身の程が知られる雨が降りて降つて來たに依つて、此大降りの雨を厭はず來て下さらば、私は深切に思はれて居る幸福あるものと知り得べし、來てくださらば思はれぬ不幸の身と知るとの意。

利生 — 利益といふに同じ。  
 敷ならぬ身には — 詞花集第九卷、雜歌上に載す、出羽辨の歌、詞書に、「忍びく、に物思ひける頃詠める」として、「忍ぶるも苦しかりけり敷ならぬ身には涙のなからましかば」とあり。歌意は、敷ならぬ身の敷きに涙さへとどめがたきを強ひて忍ぶらくるしとの意。  
 是は出羽の羽黒山 — 羽黒山は山伏の修行する處なれば戯れといふ。  
 鷲尾の十郎 — 名は經春。

西塔山伏 — 比叡山三塔の一なる西塔、即ち辨慶をさす。  
 岩木を結ばぬ云々 — 岩木の如く非情の取合せにあらぬ故のこと。白氏文集に、「人非木石、皆有情、不如此、不遇傾城色」とあり。又源平盛衰記、成親流罪の條に、「武士はさすがに岩木を結ばねば、各袖をぞ濡しける」とあり。  
 梅槽は二葉より云々 — 觀佛三昧海經に、「牛頭梅檀生、伊蘭叢中、未及三長大、在地下二時、芽經枝葉如、閻浮提竹筍、仲秋滿月、卒從地出、成梅檀樹、衆皆聞、牛頭梅檀上妙之香、永無伊蘭臭惡之氣」と説示してあり。  
 門脇殿 — 平教盛をいふ。六波羅總門の脇に住みたる故に此稱呼あり。  
 矢面 — 矢の來る正面。

矢坪 — 矢を立つべき所。

鎧の胸板押しつけ總角 — 胸板は鎧の胸、總角は鎧の背に附きたる緒の事。  
 きせなが — 鎧の種類。  
 わだのみ — 鎧の名所。  
 彼も主従 — 教經と菊王。  
 是も主従 — 義經と繼信。  
 二世の願ひ — 現在と未來。  
 三世の御恩 — 君臣は過去、現在、未來の三世を契るといふ諺をいふ。  
 八旬 — 八十歳の齡。  
 うつぼ — 矢を入れて背負ふ道具のこと。

間狂言

佐藤館の從者。

姥

彩色黄にして多く皺をたぐへ、一見、老女たるを肯かしむる面なり。  
 本曲、當麻、閑寺小町、辛部婆小町、娘捨のシテ及び高砂、結上、圓福のツレ姥に著す



姥髪



姥の面を著用する時は、常の髪の上に、白き馬鬃と疎に斑に振掛けて、姥髪を結ぶ而して他曲は、髪帯を施せども、本曲及當麻二曲に在つては、この上に花の帽子を緩い被ら

装束附 (攝待)

ツレ	源義經	直面 兜巾 襟淺黄 篠懸
ワキ	辨慶	兜巾 篠懸 着附厚板 白大口 水衣 小刀 繡紋腰帶 扇 菊高數珠
シテツレ	山伏 (立案十人)	直面 兜巾 襟淺黄 篠懸 白大口 着附厚板 縷水衣 小刀 繡紋腰帶 山伏扇 菊高數珠
子方	續信ノ子 若	襟赤 着附厚板 白大口 掛素袍 繡紋腰帶 小刀 神扇
シテ	佐藤館母信	面、姥髪 姥髪 花帽子 襟白二 着附摺箔 無紅唐織着流 水晶數珠 扇

攝詩

素謠座席順

ワシ判兼警子  
キテ官房尾方

(狂言口用)  
ツワキ辨慶上  
次レ狛  
ツヨク  
拍子ニ合



旅の衣は篠懸の。旅の衣は篠懸  
 の露けき袖やしをるらん。子に臥  
 し寅に起き馴れて。赤子に臥し寅に  
 起き馴れて雲居の月を峯の雲。  
 その松島に冬らんと。東路さうて。  
 急ぎけり東路さうて急ぎけり



ワキ詞

いかに申しゆまづこの所に御休み  
 あらうずるにてゆ ツレ兼房 権サ 承りゆ。やこれ  
 に高札カウサツの立ちてゆ ワキ 権カサ 賢ゆへ ワキ 権カサ 何々  
 佐藤の館に於て。山伏攝侍とゆ。や  
 兼房兼房 サネリ 佐藤の館に於て。  
 山伏攝侍の事は。われらが望む所  
 なれども。佐藤の館が憚りにて



ゆ程に。御通りあれかしと存じゆ  
ワキ カケテテ研カリ これは仰せにてゆへども。たゞ知らぬ  
 やうにて御着きあらうずるにてゆ  
子方鶴若 ササリ いかに誰かある 狂言 御前にゆ 子方ササリ 山伏  
 達は幾人御着きあるぞ 狂言 十二人  
 御着きにてゆ 子方ササリ まづまづ出でて對  
 面申しゆべし ワキ エフタリ これなる幼き人は誰か



諸子息にて渡りゆぞ 子方サアリ これは佐藤

繼信が子にてゆ ワキ重シモリ こそて繼信殿は

寺内に居座ゆか 子方サアリ 判官殿の御

供申し。八島の合戦に討たれて

ゆ ワキ重シモリ こそてこの攝侍は如何なる人

の御企てにてゆぞ 子方サアリ 判官殿十二

人の山伏となり。奥へ御下りの由



承りゆ程に。祖母にてゆ者この攝侍 老  
を始めてゆ。見申せば方々こそ トシラカヘ  
十二人御入りゆへ。もし判官殿に 確カニ  
ては忠をなくゆか ワキ 困カニカニツテ 暫くゆか。る  
疎忽なる事を承りゆものかな。ま  
つまづ寺内へ御入りゆへ。さればこそ 先ラカヘ  
御大事にてゆ。恐れながら忠を



替へられ。皆々の申にうちまじり。おれをゆへかしくと存じゆ

ツ判官 確カ

げにこれははたもにてゆ

三老尼上

ヨクク 會釋 拍子合ハス

いかに鶴若 何事にてゆぞ 山

子方上

伏達はいくたり御着きあるぞ 十二人御着きゆ かしましかし

子方上

まし。舊里を出でし鶴の子の



松に帰らぬ寂しさよ げにや

憚りある身として御前に参り

てさむらへば。且は亡き人の名

をも朽たし。又は子どもものいにし

への恥をも。顯すにてはさむらへど

も。餘りに御懐しき心ばかり

にて。御前に参りてゆなり。これは

故佐藤莊司が後家。繼信忠信が  
 母にてゆげにや親子恩愛の別  
 れの餘りには。色むべき人目をも  
 知らず。又は憂き身の恥をも。顯  
 すにてはゆへどもさうながらこの  
 攝侍と申すに。現世の祈りのた  
 めにもあらず。後生善所とも思

はず。嫡子繼信は八島にて討た  
 れ。弟忠信は都にて失せけると  
 ばかりにて。委しき事をも知らず  
 してひとり悲しむ身を知る雨の  
 晴れぬ心や慰むと。この攝侍を  
 始めてゆ。礼を立てしよりこの方  
 日に五人三人。乃至一人二人。絶ゆる

事はまゝにまゝにねども十二人はこれ  
 が始めにていづれがわが君ぞ  
 いづれがそにてまゝますぞ夜も  
 更けたり人の知るべき事にもあ  
 らずこの姥が身にそと御教へ  
 はこの攝侍の利生にて空し  
 くなりし兄弟を二度見ると思ふ

○小謡

べし二度見ると思ふべし親子よ  
 りも主後は親子よりの主後  
 は深き契りの中なればそこそ  
 わが君もあはれと思へめすらめ  
 殊更御為に命を捨てし郎黨  
 の一人は母一人は子なりななどや  
 吊ひの御言葉をも出だされぬ

元一 何 十 一 上 一 元 二 一  
 かほど數ならぬ身には思ひの  
 十 一 一 一 元 一 一 一 一 一  
 なかれかし。あら恨めしの浮世  
 十 一 一 一 十 一 一 一 一 一 一  
 やあら恨めしの浮世や。これは  
 思ひもよらぬ事を承りゆもの  
 かな。われら如きのも山伏の五人  
 三人行き連れ行き連れ通り  
 ゆが。今夜この攝待に十二人着

きたればとて判官殿とはかゝる粗  
 忽なる事を承りゆものかなとて  
 ながら。繼信忠信の母にしましま  
 さば。判官殿の序内の人の名字を  
 ば。存じゆべし。そなたより名をさ  
 して承りゆべし。仰せの如くわが  
 子は序内にありし者なれば。大方

は推量申すも此の女はよも遠  
 ひゆはじ兼房 閑カマニかやうにももの申す山  
 伏をばどこ山伏と遊覽してゆぞ  
シテウケテ閑カまづ唯今もの仰せられつる客僧  
 はこの御供の中にては一の老體に  
 て御入りゆな先カスレいでこの御供の中  
 に年寄りたる人は誰と心持シや今思ひ

出たりたり。判官殿の御傳増尾の  
 十郎権の頭兼房山伏にてまし  
 ますな先カカ心持シ又あれなる山伏はどこ山  
 伏にて御渡りゆぞツレ鷲尾サリこれは出羽  
 の羽黒山より出でたる客僧にて  
 ゆシテカミリノミいやはこれは播磨の人の聲に  
 てゆ心シテそれをいかにと申すにこの

姥はもと播磨の者。十三の年繼  
 母を恨み都に上り。故莊司殿と  
 契り。繼信忠信をまうけ。今かく  
 憂き目を見ゆへば。たゞ恨めしうと  
 せゆへ。さればわが國の人の聲なれ  
 ば。なごかは知らでゆべき。いでこの  
 御供の中に播磨の人は誰ぞ。これ



も思ひ出だしてゆ。判官殿鶴越と  
 やらんを通り給ひし時。狩人の姿  
 にてさきありあひ。そのまゝ名字賜は  
 り。今までも御供と聞え。鷲の  
 尾の十郎山伏にて御渡りゆな  
 してかき申す山伏をばどこ山伏と  
 知らしめされてゆぞ。この御聲



こそぞ大事にてゆへ都の人の聲か  
 と思へば。又近江の人の聲にも似  
 たり。もの仰せられゆも何とやら  
 ん物々しく見え給ひてゆ。あつは  
 れこれは西塔山伏ござあれ。それ  
 ならば本は近江の人。三塔一の遊  
 僧。今は又わが君の一人當千の



○小謡

武士よなう。武士も物のあはれ  
 は知るものを。なごされば餘り  
 に御心強くましますぞあかさ  
 せ給へ人々と餘所目も知らず。後  
 き居たり人目も知らず。後き居  
 たり。かく心もなき人々に。このみ  
 言葉をし盡し給はんより。今ははや



序内へ御入りのゆへ判官カケテ暫くびまこと

繼信の御子ならば判官殿と思

しきをさう給ひゆへ子方カル上采ニミサリ承りてゆ

とて十二人の山伏の皆御顔を見渡

してどれとそれにておはしませ

さてそれにてあるべきとは何故に仰

せゆぞ子方サラリいやいかに色ませ給ふとも

判官詞カシテ

○小謡



人にかはれる御粒ヨソホひカール上采ニミサリ疑ひもなき

わが君よ上歌同父給ウツササリべなうとて走り

寄れば元丈岩木をむすばキぬ義經

なれば泣く泣く膝ヒザに抱アきとる甲

げにや元梅ウツク擅ダンはニ葉ハよりこそ匂

ふなれ甲真マコトに繼信ツグノブが子コなりけり

とキ餘所ヨソの見る目メまでマデ皆みな涙なみだを

ぞ流しける。今は何をか隠し  
 申すべき。わが君にて流すはどの  
 上は流すを直されゆへ老尼も近  
 う御参りあつて御目に懸り申  
 されゆへ。あらありがたやゆ。わが  
 君を拜み参らするにつけて。子供  
 の事こそ思ひ出でられてゆへ



げにげにむもにてゆ。いかに申し  
 上げゆ。繼信が八島にての最期の  
 有様。剛なりとも申し。又不覺な  
 りとも申す。いづれが真にてゆや  
 らん承りたくゆ。いかに辨慶  
 御前にゆ。繼信が八島にての最  
 期の様を。委しく語つて老尼に

聞かせゆへワヤウヤナカニ畏つてゆへ確カリ由説と申し  
 所望といひ。懇ネンコロに語つて聞かせ申  
 しゆべし。由前ユゼン近う御参りゆへ。  
語さても八島の合戦。今コノはかうよと  
 見えしに。門脇カドワキ殿の二男。能登ノトの守  
 教ノリツネ経と名乗つて。小船コボネに取ツり乗ノり  
 磯イソ間マ近チカく漕コぎ寄ヨせいかに源氏



の大將源九郎義経に。矢ヤ一筋ヒトスヂま  
 ゐらせん受けて見給へとのしる。  
内へトリ確カリかう申す各々オノオノを始ハジめとして皆御  
 矢面ヤオモテに立タたんとせしが何ニとやらん  
 心遅ココロオソクれたりし處トコロに。繼信ツグノブは心勝ココロマカ  
 りの剛ガウの人ヒトにて。お馬ウマの前マヘに強クかけ  
 塞フサがつて。義経ツグネこれにありやとて

につこと笑ひてひかへたり。さてその  
 時に教経は。彎マカき設セけたる弓  
 なれば。矢坪ヤツボを指サしてひやうと  
 放ハナつ。過カたず繼信ツグノブが著キたりける。  
 鎧ヨロヒの胸板ムネイタ押オしつけ揚アゲ巻マキ。かけず  
 たまらずつと射イ通ト。後ノチにひか  
 へ給タマわが君キミの。御著ミツ背セ長ナガの草クサ

摺ズリにはつたと射留イむ。さてその時  
 に繼信ツグノブは。馬ウマの上ノにて乗ノり直ナら  
 ん乗ノり直ナらんとせしかども。大事オホコト  
 の手テなれば堪タへずして。馬ウマより  
 下シモにどうと落オつ。やがてわが君キミお  
 馬ウマを寄ヨせ。繼信ツグノブを陣デジの後ノに鼻ハか  
 せ。いかに繼信ツグノブ。いかにいかにと宣ノへ

ども。たんだ弱りに弱つて終に  
 空しくなる。なんぼう面目もな  
 き物語にてゆ。ミテ困カシツテ  
 の忠信はゆはどつけるか。あ  
 ら愚かや忠信は。日の下に於て隠  
 れま。ま。さ。ず。能登殿の童里菊  
 五丸。繼信が首を目かけ。渚の方に

走り渡るを。忠信響いて放つ矢  
 に。菊王が真中射通。それがつば  
 と轉べば。教経舟より飛んで下  
 り。菊王がわたが又掴んで。遙か  
 の船に投げ入れ給へば。程なく船  
 にて空しくなる。眼前兄の敵を  
 ば。弟の忠信こそ取つてゆへ

シテカ<sup>上</sup>ル<sup>未</sup>、<sup>拍子合ハズ</sup>さては敵も大將に事へ申し

御童<sup>早詞</sup> 繼信は又わが君の秘藏

に思せし<sup>内</sup>内の人<sup>シテ上</sup> かれは平家

の船の内<sup>早カ</sup> 此方は源氏の陸の陣

かれも主後<sup>シテ</sup> かれも主後<sup>思</sup> 思ひ

は同じ思ひなれば<sup>ワキ</sup> 餘所の歎

きを思ひ合はせて<sup>ナゲ</sup> 御慰みもハへ

とよ、<sup>野</sup>シテ<sup>中</sup> それは仰せまでもさむら

はず御身代りに立ち参らす

上は<sup>ハ</sup>今世後世の面目なり<sup>ハ</sup>より

ながら一人なりとも御供申し御

後をも肩にかけこの御座敷に

あるならば<sup>同</sup>十二人の山伏の十

三人も連なりて唯今見ると思

是トいチかキはハ嬉シしカるルべキまシ切キ○ヤその  
 時ト義シ經キ老ロ尼ニにニ語リ給フやウハ  
 島トにてニ繼シ信シ今イはハかウよト見エ  
 一ト時ト思フ事コトあラばハ委ク言フ  
 ひハ置ケとトくれレれレ尋ネ回ヒに  
 繼シ信シ其ノ時トにニ息ノ下タよりシ申ス  
 やウ弓ヲ矢ヲ取ル身ノ御ノ身代りにニ

立ツ事ニ世ノ願ヒやハ三世の恩を  
 少シ報謝すル命ノ輕キ身ハ  
 露塵何カ惜シかラんキさリなガら  
 古里にハ旬に及ブ母と十に餘るわ  
 らんべこれらが事の不便さを少  
 し心にカる雲の月に覆ひて光  
 も暗くなる如くそのまくれれ



と終に空しくなりけりウケテスアリ 判官上ウケテスアリ かの  
 に郎黨を討たせつウケテスアリ 自ら手を  
 碎き忠勤まこと曇らずは終に  
 治まる世に出でてア 繼信忠信が  
 子孫を尋ね出だして命の恩を  
 報せんと思ひし事も空しくわ  
 れさへかゝる姿にてその名をだに



判官上

も名乗り得ぬ憂き身の果ぞ  
 悲しきキ切 母は思ひに堪へかねて  
 更くるも知らず有明の月の盃  
 取り出だしお酌にこそまゐりけれ  
 げにや心を汲みて知る人の情の  
 盃を涙と共に受けて持つ子方上 鶴若  
 酌に立ち代り別れし父の御前



にて給仕すると思ひなして同十二  
 人の山伏の終夜の酌を取り廻り  
 座敷にも直らで進み勇ある有  
 様を父に見せばやとぞ思ひ  
 さるほどに夜もほのぼのと明け  
 行けば夜もほのぼのと明け行  
 けば暇申してさらばとてはやと



の宿を立ち出づる子方カル上いかに誰かあ  
 る馬に鞍置き拍子合ハズ弓鞍をやらせよ君  
 の御供申さうするにシテ詞カシテ「そも御  
 供とは何事ぞ」子方サマリ君の御供申し  
 てこそ親の敵にも逢ふべけれ  
 「それは弓矢の御供なりこれシテカシテ詞カシは修  
 行の山伏道に何の敵のカタクキあるべきぞ

<sup>子方カ生</sup>「あらば思ひ出だしたるよき  
 兜中<sup>スズカケ</sup>篠懸<sup>カケ</sup>をどく<sup>コシラ</sup>拵へてたび給へ  
 山伏道の御供せん <sup>ワキ詞</sup>辨慶<sup>ハニシ</sup>涙を  
 押へつ。いかに申さん鶴若殿。ま  
 こと御供ありたくは。今日は道具  
 を拵へ給へ。明日は迎ひに参るべし  
<sup>子方上</sup>「真ごうか <sup>ワキ</sup>なかなかに <sup>兼房</sup>われも迎



老尼は鶴若を抱き入れ

ひにまゐるべし <sup>ワキ</sup>われも迎ひに参  
 らんと <sup>同</sup>面々<sup>ハシ</sup>聲々にすかされてい  
 とけなき身の悲しさは <sup>ワキ</sup>真ごと  
 心得て <sup>ス</sup>少し言葉の弱りたるをり  
 を得て <sup>ス</sup>客僧は泣く泣く宿を出  
 でければ <sup>ス</sup>老尼は鶴若を抱き  
 入れ <sup>同上</sup>行くは慰む方もあり。とま

撰後  
 五七冬  
 らんや涙なるらんとまるや涙なる  
 らん

國 栖

世阿彌元清作

曲 柄 五番目(略初能)  
 季 節 三 月  
 所 古 蹟 三 級  
 大和國吉野郡國栖村

梗概

天武天皇(子方)大友皇子に襲はれさせ給ひ、官人(ワキ)を  
 隨へて大和國吉野川のほとりに遷らせ給ひ、とある庵に入ら  
 せ給ひぬ。折しも舟をさし寄せて歸り來れる主の老人夫婦(シ  
 テ、ツレ)根芹を洗ひ若菜を揃へ、國栖川の鮎を紅葉に焚き  
 て供御に供へ奉りけるが、翁、供御の御残りを賜はりて、焚  
 きたる魚を川に放てば、岩きる水に生き返りて、二度都に還  
 幸あらせらるべき吉瑞を現はしぬ。かゝる處に、追手襲ひ來  
 りしかば、翁は漁舟の底に隠し參らせて、巧みに追手を走ら  
 せ、危き御命助かり給ふ。天皇叡感の餘りありがたき御言葉  
 を賜はれば、老人夫婦感涙に咽びしが、既に夜も更け行けば、  
 音楽を奏して慰め奉らんとしひて立ち去りぬ。(中入)  
 程もなく天女(後ツレ)天降りて五節の舞を奏すれば、藏王權  
 現(後シテ)亦出現して、十方世界に飛行して大勢力を示し、  
 御代を守るべきことを誓ひけり。

謡ひ方

輕からざる曲にして、貴顯に對する尊敬、君臣の感慨、夜の更  
 くるにつき靈氣益々加はり、身を何時しか神仙の境に入らし  
 むる感あらしめ、滋味の内に意氣を合せ、數々の變化あり、  
 よく其趣を謡ふべし。  
 △シテ 藏王權現の化身たる、老翁の趣を心得て、重んもり  
 と莊重に「姥や見給へ」と謡ひ出す、此謡ひ出しの一句大切  
 なり「おうたゞならぬ」と氣をかけ「昔より天子の」と調子  
 抑へめに閑かに、以下ツレとの掛合は落着いて、次のワキと  
 の掛合は愼ましく閑かに「いかに姥」と氣を變へ確かりと「そ  
 れこそ日本一の事」とかけてたつぷりと「我らも」と氣を變  
 へ閑かに「おほぢも」と確かりと「あらありがたや候」と愼  
 ましく「いかに姥」と氣を變へ「いざこの吉野川に」とかゝつ  
 てすらりと「いやいや昔も」と氣をかけ確かりと「此魚もな  
 どか」と強き心にてはつきりと「此方へ御任せ候へ」と落着い  
 て閑かに「いかに姥」と氣を變へ「何清見はらへ」と確かりと  
 「扱は清見原とは」と稍抑へて「其上此山は」と確かりと、以

下段々と手強き心「何と船が」とかゝつて手強く「これは乾す船」とかろめに「何と船を捜さうとや」よりかゝつて手強く、以下段々と手強く氣を込め「山々谷々の者ども」より大きく運んで「あの狼藉人を」と充分に強く、確かりと氣を入れて誦ふ、總じて狂言との掛合は、軽く誦ふなれど此所は曲中にも主眼なる處なれば、殊に充分に力を込めて誦ふべし「今はこうよ」と全然氣を變へて、朗らかにさらりめに「えいや」と氣をかけて「えいと」イロにて確かりと誦ふ。

△後シテ 充分に位を取り、堂々と大きく誦ひ出し、地との掛合は勢ひ能く、確かりと誦ふべし。

△ツレ 老女の事なれば、さら／＼と誦はず、シテよりは調子高く取りて「なう聞し召せ」と少し間を置き誦ひ出し「えいと」の連吟はシテの位に従ふ。

△子方 調子高く品位を持ちさらりと「身は宿善の」と拍子に合ふ所なれば少し閑かに誦ふべし。

△ワキ 總じて餘り浮立たぬ様に、さらりと誦ふ「道々たらば」以下節をたつぷりと、サシは滞らぬ様に、下歌は氣を變へ閑かに、上歌は稍朗らかに「御急候程に」と氣を變へ落着いて「これは由ある」とはつきりと「いかに尉」と荒くならぬ様に、次の「いかに尉」とかゝつてさらりと「そも打返して」と閑かに、三度目の「いかに尉」と氣を掛けて手強く「有難や

さしも」サシは朗かにさらりと誦ふ。

△地 「さもや」となき」とさらりと受けて「そもやいかなる御事ぞ」ととくと閑め「か程賤しき」と元へ戻しさらりと「御事や」と閑め「吉野の」とかゝつてさらりと出で「事とかや」とゆるめ「蕁菜の羹」より引立て、朗かに「岩切る水に」と鮎の段は勢よく、さらりと進んで、こけぬ様に氣合を掛け「思し召されよ」と閑めずに「船引起し」と朗かに、クリはさらりと引立て、サシは運んで「身は宿善の」と朗かに受け「立ち歸りつゝ」より引立て、うつきりと「泣き居たり」と閑め、クセはさらりと運び「所は月雪の」より引立て、花やかに「これなれや」と強吟にてとくと閑め「や」の廻し跡を呂に落す「少女子が」より調子を改め乗つて「蔵王とは」と確かりと納めて「即ち姿を現はして」と勢ひ能くさらりと、返しより位進めて、以下シテとの掛合は力の抜けぬ様に手強く「東西南北」より段々と進んで、威を込めて誦ひ納むべし。

**能の異式** (小書)

白頭 — 後シテが白頭となり、位が重くなる。

天地之聲 — 幕の内にて「王を藏すや」と誦ひ出し「即ち姿を」と走り出る、此時は白頭となるなり。

語 釋

國籍 — 天武天皇の未だ大海人皇子と申しける頃、大友皇子

に襲はれて吉野山に通れ入り給ひしを、山神老人夫婦と現じて救ひ奉り給ひし時、天皇の饑を凌がせまゐらせんと國栖魚(鮎)を供へしによりかくいふ。

神風や — 伊勢の枕詞なれど此處は國名を代表す。

五十鈴の古き — 五十鈴宮は伊勢内宮のことをいふ。故に天照大神の御系統を受け繼ぎ給ふの意なり。

御裳澗川 — 伊勢内宮の地を流るゝ川、御系統の一流なる聲に用ひたり。

御伯父何某の連に — 右大臣大中臣金連は大友皇子方なればいふなるべきも、伯父の文字は事實に當らざるべし。

宇陀の御狩場 — 昔時大和國宇陀郡に御料狩場ありたり。

祖父が — 老翁自らいふ。

供御 — めしあがりものをいふ。

國栖魚 — 大和國吉野郡の奥の國栖村にて取るゝ鮎をいふ。

心若菜を — 心は若やかなる意に云ひかけたり。若菜は根芹のこと。

菜摘の川 — 吉野川の上流をいふ。夏箕とも書く。

紅葉を林間に焚き — 白氏文集第十四卷に載す、白居易の詩、送三王十八歸山寄題仙遊寺、曾於太白峰前住、數到仙遊寺裏來、黑水澄時潭底出、白雲破處洞門開、林間暖酒燒紅葉、石上題詩拂綠苔、惆悵舊遊無復到、菊花時節羨君

廻ことあるを引く。蓋し紅葉を焼くとは眞に紅葉を折りくべて焼くにはあらず、紅葉火の如く紅なるを喻ふる心なり。

蕁菜の羹鮎魚ととも — 昔晋の張翰と云ふ人、官の爲遠國に赴任してありけるが、秋風の吹き立つ頃、故郷の蕁菜鮎魚の鮎を思ひ出して、人間は我志に適ふを得るを貴ぶ、何ぞ能く不自由しつゝ數千里の地に官たらん。とて官を罷めて歸りし古事を引用す。

打ち返して — 裏返しての意。

玉島川 — 肥前國東松浦郡にあり。

其如く — 神功皇后の新羅を討ちて御歸國ありし如くなりとの意。

岩切る水に — 急流を形容する詞。萬葉集に、「吉野川岩切りとほし行く水の」など見ゆ。

何清見ばらへ云々 — 清見原といふを空とほけして清見祓へと聞き違へたるなり。清見祓は神詣などする時海川に行きて身を清むる作法をいふ。清め祓へといふが正しきことなり。

又清見原は天武天皇御即位の後の都にて、大和國飛鳥の地にあり。今此曲にては未だ此稱を用ふべきならねど、後を前に廻らして云へる例は外にもある故、強ひて替むべきにもあらず。

都率 — 都率天といふ、即ち天國の名。

五臺山青龍山——唐土にて佛法隆盛の寺ある山。

翁もにつくき者ぞかし——勢力ある者ぞとの意。

君は舟臣は水——荀子より出でたる文句。

積善の餘慶——易經より出でたる文句。

身は宿善の——宿善は前世の善根によりて、今世に君王と生

れしをいふ。

蟠龍の雲井——わだかまりたる龍の雲を起して天上するをい

ふ。

琴の音に云々——拾遺集に載す歌に、「琴の音に嶺の松風か

よふらし何れのをより調べ初めけん」とあるを引用す。

五節の始め——五節は十一月に内裏にて舞姫の舞曲を天覽あ

る儀法なり。

勝手八所——勝手大明神の社は吉野藏王権現の少し上にあり。

現今は山口神社と稱す。八所とは此社に屬せる神々をいふに

や、詳かにせざるも祭神は一柱にて、愛靈神なるよし縁起に

見ゆ。

子守の御前——吉野山の奥たる山上にあり。現今は水分神社

と稱す。

藏王とは——藏王権現は吉野町にあり。今天皇を藏し申すよ

しに取りなしていふ。役の行者大和國金峰山に於て練行の後

感得する所なり。其形相は忿怒身にして三眼あり。右手に三

鉈を握り、左手を開いて腹を押へ、降魔の相を示し、兩脚は上下して以て天地經緯の相を示せり。其本地は釋迦佛なりといふ。

天を指す手は——權現の像の姿をいふ。

胎藏、金剛——胎藏とは眞言宗に云ふところの兩部曼茶羅の

一なり。恰も彼孩兒が母胎中に攝待發育せらるゝが如く、一

切の萬法身が、此六大法身の理徳の中に攝待發育せらるゝを

顯はして、胎藏の名を立つるなり。即ちこれ大日如來の理性

を表するなり。故に胎藏界は共に此胎藏界の理想をあらはせ

る曼茶羅を、他の智性の方面を顯はせる金剛界曼茶羅に對し

て云へるものなり。金剛とは具さには金剛界といふ。又金剛

界の曼茶羅(グジラダーツ、マンダラ)といひ、兩部曼茶羅の

一にして密教の根本教義を形成す。即ち佛果の徳を示し、大

日如來の智徳を表し、從因向果の始覺を明すものなり。金剛

界の九會、金剛界の五百餘尊、金剛界の大日等ありて、胎藏

界の胎藏界七百餘尊即ち胎藏界十三大院の諸尊、胎藏界の五

佛、胎藏界の理門、胎藏界の垂跡、胎藏界の曼茶羅、胎藏界

の大毘盧遮那、胎藏界の不動、胎藏界の辨財天等ありて、兩

部曼茶羅の廣範なるを知るべきのみ。

十方世界——四方四隅に上下を加へていふ語。

### 問狂言

早打出づ。

「モ」やるまいぞ〜「ツ」遁すまいぞ〜「モ」やるまいぞや

るまいぞ「ツ」遁すまいぞ〜「モ」こゝまで追ひつめたが知

れぬ。不思議な事でありやる「ツ」合點の行かぬ事でありやる

「モ」あれに翁が居る。問はう「ツ」ようおりやらう「モ」やい

翁。清見原の天皇はどちへお行きやつたぞ知らぬか「ツ」耳

が遠いさうな。今一度問うて見さしませ「モ」やい翁清見原

の天皇はどちへお行きやつた。知らぬかやい「ツ」さては知

らぬと見えた戻らう「モ」ようおりやらう。さりながらあれ

に舟がうつむけてあるが合點が行かぬ。問ふて見よう「ツ

」問うて見さしませ「モ」やい翁。その舟は何とてうつむけて

あるぞ。干す舟でもあれ。うつむけてあるが心許ない。搜いて

見よう「ツ」搜しませ(はたか)「モ」あゝ静まれ静まれ。やか

ましいいふな。搜すまいぞ〜。なう〜あれ聞かしますせ。

谷峰から寄つて來ると見えて聲高な。足下の明るいうちに戻

らう「ツ」ようおりやらう「モ」おりやれ〜「ツ」心得た〜

「モ」おりやれ〜。

大飛出

全泥を以て  
崇嚴に  
彩色し



眼ひらき、口明き、  
髪逆しまに麻き、  
氣勢昂りて頗る  
閑路の趣あり、  
即ち本曲山嵐、  
加茂の後シテ  
等の  
神に用ふ



舟  
甜地の  
緞子にて  
色みつり  
之とシテ程  
先に出して  
シテツレ出で  
打乗り、シテ  
竿を持つ後に  
この舟を伏せて  
子方を蔽ひ隠す  
所作あり

國柄

素議座席順

ワシツ子  
キレカ

立<sup>ワキ</sup>衆<sup>上</sup> 確<sup>カ</sup>方<sup>サ</sup>アリ  
一<sup>セ</sup>イ<sup>ツ</sup>ヨク<sup>ク</sup>  
柏<sup>子</sup>三<sup>合</sup>ハス  
思はずも雲居を出づる春の夜の  
月の都の名残かな 道々たらば  
位<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup> 上<sup>ラ</sup>ら<sup>ゴ</sup>ら<sup>メ</sup>や<sup>ナ</sup>だ<sup>ダ</sup>の<sup>メ</sup>め  
神風や五十鈴の古き末を受くる  
御方にておはします 立<sup>ワキ</sup>衆<sup>上</sup> この君と

作 物	装束 附 (國柄)						
	後シテ	後ツレ	前シテ	ツレ	ワキツレ	ワキ	子方
奥舟 釣棹	麗王權現 面、大飛出 赤頭 色鉢卷 輪冠又ハ唐冠 襟紺 着附厚板 半切 拾狩衣 繡紋腰帶 神扇	(諸ナシ) 女 面、連面 電 電帶 天冠 黒垂 襟赤 着附摺箔 緋大口 紫長絹 縫腰帶 天女扇	尉 面、朝倉又ハ笑尉 尉髪 襟淺黄 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 腰袋 扇	能 面、姥 姥髪 無紅電帶 襟萌黄 着附摺箔 無紅唐織 縷水衣	興昇二人 着附厚板 白大口 繡紋腰帶 扇	供奉官人 着附厚板 白大口 法被 繡紋腰帶 太刀 扇	天武天皇 初冠 襟赤 着附摺箔 込大口 指貫 單狩衣 縫腰帶 黒竹扇



申すに御譲りとして天津日嗣を  
 受くべき處に御伯父何某の連  
 に襲はれ給ひ都の境も遠田舎  
 の別れぬ山野の草木の露分け  
 行く道の果までも序幸と思へば  
 頼もしくやお切 拍子三合身を秋山や世の中  
 の宇陀の序狩場餘所に見てお切

○小謡 上歌

牡鹿伏すなる春日山。牡鹿伏す  
 なる春日山。水嵩ぞ増る春雨  
 の音はいづくぞ吉野川。よしや  
 暫しこそ。花曇りなれ春の夜  
 の月は雲居に帰るべし頼みを  
 かけよ。玉の輿頼みをかけよ玉の  
 輿。ワヤ詞 元カウ、確カニ御急ぎの程にいづくとも知ら



ぬ山中に御着きにしてまづこの  
 所に虎座をなされうするにてゆ  
 嬌や見給へ 何事にてゆぞ かの  
 おほちが伏屋の上に紫雲のたな  
 びいたるを拜まい給うたか げに  
 げにあたりに紫雲たなびきたる  
 ならぬ空の氣色やな おうた



ならぬ氣色はよ 昔より天子の  
 虎座所にてそ 紫雲は立つと申せ。

もしも不思議に尉が住家に  
 上 寄せてわが家に帰  
 見れば不思議やとればこそ 玉の  
 冠直衣の袖 露霜に萎れ給へ

ども シテ上 すが紛れぬ御粧ひ

○小謡

同

さもやごとなき御方とは疑ひも

なく白糸の釣竿をさし置きて

そもやいかなる御事ぞかほど賤

しき紫の戸の暫しが程のおま

しにもなりける事よいかにせん

あら忝の御事やあら忝の御

事や。これはそも何と申したる

御事にてゆぞ。これはよしある

御方にて遊座のか。同近き人に龍衣

はれ給ひ。これまで御忍びにてゆ。

何事も尉を頼み思ひめさる事の

御事にてゆ。さてはよしある御

方にて遊座のか。幸ひこれはこの尉



が庵にての程に。御心安く御休みあ  
 らうするにてゆ ワキサリメ しかに尉。面目も  
 なまき申し事にてふ エ ども。この君三  
 日が程供御を近づけ給はずゆ。何  
 にてても供御に供へゆへ シテウケテ困カニ へその由。姥  
 に申さうするにてゆ ヒラカハ いかん。姥聞いて  
 あるか。この二三日が程供御を近づ

け給はずゆとの御事なり。何にて  
 も供御に奉り給へ ツレサリ へをりふし。これ  
 に摘みたる根芥のゆ シテウケテ困カニ へそれこそ  
 日本一の事。われらもこれに國極魚  
 のゆ。これを供御に供へ申さうする  
 にてゆ ツカサ上本 姥は餘りの忝さに胸うち  
 さわぎ摘み置ける。根芥洗ひて

老が身も心若菜を揃へつゝ供御  
 に供へ奉る。それよりしてぞ三吉  
 野の菜摘の川と申すなり

ミテ詞 同カニ確カリ

おほちも色濃き紅葉を林間に

焚き。國柳川にて釣りたる鮎を焼

き。同じく供御に供へけり

の國柳といふ事もこの時よりの事

○小謡



同様にすれ人

とかや。尊み菜の美美鱸魚とてもこ

れにはいかで勝るべき。同近く冬れ

老人よ同近く冬れ老人。いかに

尉供御の御残り。を尉に賜はれとの

御事にてい。あらありがたや。さら

ばうち返して賜はらうずするにてい

そもうち返して賜はらうずするとは。



同様にすれ人



ミテ詞 同カニ確カリ

ワキ 同カニ

何と申したる事にてあるぞ シテウケテスアリ けうち

返して賜はらうずると申すこそ國

栖魚ズイラのづるしにてゆへヒラカスに姥供御

の残りノコを尉ノに賜はれとの御事にて

ツレサアリゆがこの魚は未だ生々と見えたる

げにこの魚は未だ生々と見えてゆ

シテカウチ確カリいざこの吉野川に放いて見よう

ツレサアリ條なき事な宣ひそ放いたればと

て生き返るべきかは シテウケテスアリいやいや昔

もさる例あり。神功皇后新羅

を従へ給ひり。右方に玉島川の鮎

を釣らせ給ふ。その如くこの君も。

二度都に還幸ならば。この魚も

なごか生き返らん 同 岩まきる水

○鮎之段獨吟  
仕舞





に放せば。若きる水に放せば。さ  
 も早瀬の瀧川に。あれ三吉野や  
 吉瑞を現す魚のおのづから。生き  
 返るこの占方頼もしく思ふ。めされ  
 よ。早鼓ワキ詞カニツテいかに尉。追手がかりてゆ  
 此方へ御任せゆ。いかに姥。あの舟  
 舟いて來り。心得申しゆ。なシテなシテにシテ



清み被へ。清み被へならばこの川  
 下へ行け。狂言シテは清見原とは  
 人の名よな。あら聞き馴れずの  
 人の名や。そのよこの山は。都率の  
 内院にもたさへ。又五臺山清涼山と  
 て。唐土までも遠く續ける吉野山。  
 隠れ家多き所なるを。いづくまで

尋ね給ふべき。速かに帰り給へ狂言  
 何と舟が怪しいとや。これは乾す舟シテカシキテ強ク  
 ぞとよ狂言 何と舟を捜さうとや。  
 漁師の身にては舟を捜されたる  
 も家を捜されたるも同じ事ぞ  
 かし。身こそ賤しく思ふともこの  
 所にては翁もオキナにつくまき者ぞかし。



孫もあり曾孫もあり。山々谷々  
 の者ども出で合ひてあの狼藉人  
 をおち留めゆへおち留めゆへ狂言  
 なう聞しめせ追手の武士は帰  
 りたり。今はかろよとおほら焼  
 は嬉しやかを。えいや。えいと  
 舟引き起し尊體の舟引き起し



尊體の御恙なく川舟のかひある  
 御命。助かり給ふぞありがたまき  
クリ地上 それ君は舟臣は水。水よく舟を  
拍子合ハス 浮かむとはこの忠勤のたとへなり  
ワサシ上 ありがたやさしも姿は山賤の  
ウツエサアリ 心は高き謀げに貴賤にはよらざ  
ワキ中ノ内 りけり 積善の餘慶限りなく

ウツエサアリ 流れ絶せぬ舟裳濯川濁れる世  
ガ には住み難し されば君とし  
 てこそ。民をはごくむ習ひなるに  
ウツエ 却つて助くる志 身は宿善の  
ウツエ かひぞなきキ切 身は宿善のかひぞ  
 なき一葉の舟の行く末蟠龍の雲  
 居終になど。さらさらめや都路にキ切



立ち歸りつ。秋津洲のよしや世  
 の中治まらば。命の恩を報せん。と。  
 綸言肝に銘じつ。夫婦の老人は  
 忝さに泣き居たり。さる程に更  
 け静まりて物凄しいかに。て  
 かこの程の赤心慰め申すべきしか  
 も所は月雲の三吉野なれや花



鳥の色音によりて音楽の呂律  
 の調め琴の音に。嶺の松風通ひ  
 来る。天つ少女の返す袖五節の  
 はじめこれなれや

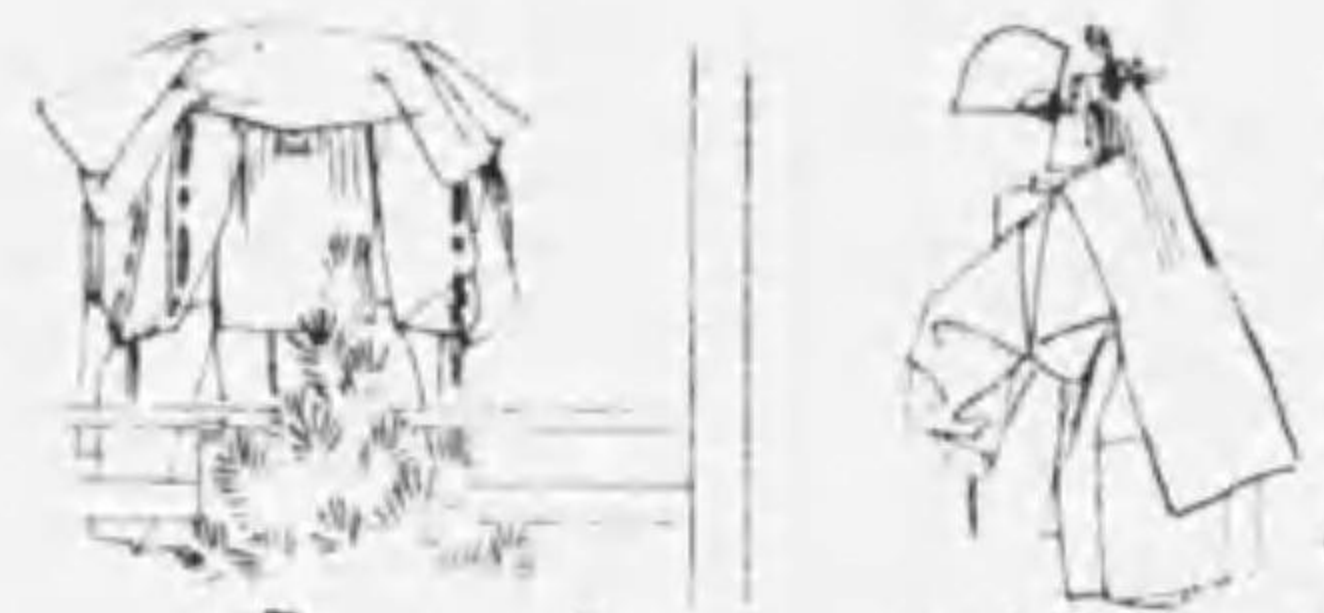


少女子が。少女子が。その唐玉の琴  
 の糸ひかれ奏づる音楽に。神ども  
 來臨し。勝手八所この山に子守



中入天女樂 奇上

○仕舞



の前藏王とは後シテノラス王を藏すや  
 吉野山赤上即ち姿を現して即ち  
 姿を現し給ひて天を指す手は  
 胎藏シテ地を又指すはシテ金剛寶  
 石の上セキに立つて一足を掲げ東西  
 南北十方世界の虚空に飛行し  
 て普天の下率土の内に王威を



いかでか輕んぜんと大勢力の力を  
 出だし國土を改め治むる時代の  
 天武の聖代畏き惠みあらた  
 なりけるためしかな。

# 雷電

作者不詳

## 梗概

比叡山延曆寺の座主法性坊の律師僧正(ワキ)天下静謐の祈禱をして仁王會を執り行ひける處に、菅丞相の亡靈(シテ)訪ひ來りて、生前の師恩を謝し、われ鳴る雷となりて内裏に飛び入り、われに憂かりし雲客を蹴殺すべし、その時僧正を召さるべけれど、かまへて参り給ふなといふ。僧正、一二度までは参るまじきも、勅使三度に及ばば、いかでか参内申さざらんと答へしに、丞相怒りて面色鬼の如く變じ、本尊に供へたる柘榴を噛み碎きて妻戸に吐きかくれば、忽ち火焰となつて燃え上りしを、僧正洒水の印を結び鐵字の明を唱ふれば、火焰は消え、丞相も煙のうちに立ち隠れぬ。(中入)

僧正召されて参内すれば、黒雲虚空を覆ひ、電四方に閃き渡つて、雷神(後シテ)現れ出で、僧正と引き違ひては、紫宸殿清涼殿梨壺梅壺と鳴り轟きけるが、聞法秘密の法味に預かりし上、天滿大自在天神を贈官せられしかば、悦びて虚空に上り去りぬ。

曲柄 五番目(略初能)  
 季節 八月  
 稽古 四日  
 所 近江國滋賀郡比叡山延曆寺

## 謡ひ方

菅相公の亡靈なれば、前半は荒々しく謡はず、品位を持ち閑かに、後は勢を込め力の抜けぬ様、はき／＼と謡ふべし。

△シテ サシの出は健實に、調子低めずに朗かに出で「聞けば内にも」と受けて「頃しも今は」と抑へめに閑かに「夕月の」とかけて確かりと「中々の事」と叮嚀に「秋に後る」と氣を變へ抑へ目に閑かに「これを三悌」と閑かに「中にも」と氣を變へさらりめに、上端は朗かに「我れこの世にての」と氣を變へさらりと出で段々と確かりと「いや勅使」とかゝつて手強く「其時丞相」と氣合を前と變へ、手強く凄味を持ちて謡ふ。

△後シテ 後シテは雷神なれば豪壯に荒々しく、充分に力を込めてさらりと謡ふ。

△ワキ 天台の座主なれば、充分に位を持ち謡ひ出し、「扱も我れ天下の」とはつきりと「けにや恵みも」と伸んびりと、上歌は重んもりと抑へめに「深更に軒白し」とどつしりと、以下シテとの掛合は、シテの位を奪はぬ程の閑かさに「扱御

雷電

身は」とかゝつて落着いて、シテとの連吟はシテの調子に合  
せ「たとひ宣旨は」と嚴そかに「王土に住める」と慎重にとつ  
しりと「折節本尊の」と確かりと諷ふ。

△後ワキ 落着いて堂々と、威を籠めて諷ひ出し「さればこ  
そ」と確かりと「其時僧正雷に」かゝつて手強く力を込めて  
「あら」と抑へて「けしからずや候」といろにてどつしりと  
諷ふ。

△地 初回は朗かに出で長閑に「忝しや師の」と閑かに、ク  
セは閑かに出で「扱勸學の空に入り」より氣を變へ稍さらり  
めに、上端は朗かに引立て、運びを附け「おつとつて」とかゝ  
つてさらりと出で、返しより進んで「僧正御覽じて」と氣を  
變へ確かりと少しゆるめ「火焰は消ゆる」より手強く進んで、  
返しの「失せ給ふ」と中入前を閑め、後の「さしも黒雲」と手強  
くさらりと「不思議や」より乗つて強く確かりと出で「現は  
れたり」乗を外して大きく「思ひ知らせん」と乗らずに確か  
りと出で、返しより段々と運んで「千手陀羅尼」より稍緩め  
て「菅丞相に」とかけて以下たつぷりと留を閑めて諷ひ納む。  
能の異式（小書）  
替装束 — 前後とも装束變る。

語釋

雷電 — 菅原道真筑紫にて薨去ありし後、其靈雷電となりて、  
君側の森臣どもを取り殺さんとせしが、法性坊の法力により  
て祈り伏せられ、天満大自在の勅號を賜はりしとの俗説を作  
曲しかくいふ。

比叡山延曆寺 — 始め一乘止觀院と號す。延曆七年、傳教大  
師が近江國日枝山（比叡山の舊名）に草創せられしものなるが  
大師入唐歸朝の後桓武天皇の勅により、大伽藍を建立し、堂  
塔を増築す。弘仁十四年、嵯峨天皇勅して延曆寺の號を賜ふ。  
これより比叡山延曆寺と稱せらる。天台宗の本山たり。天長  
元年、義真和尚本寺貫主となり、天台座主の稱號を受けしよ  
り、慈覺、智證其後を繼承し、宗風大に振ふ。戒壇院の建設  
せられたるは、慈覺大師入唐後、唐土五台山の士を將來して  
壇場を築かれしによる。其唐土の天台山に擬するの故を以て、  
或は台嶽、台嶺と稱し、王城の長にあるを以て良岳とも呼び、  
南都に對して北嶺ともいふ。又園城寺を寺門として山門とも  
稱す。中古以降、山法師と稱するもの兵器を擁して跋扈した  
るは、實に此寺の僧徒なりき。寺境三塔を分つ。東塔、西塔、  
横川これなり。  
座主 — 延曆寺の座主即ち住職僧。  
法性坊 — 第十三代天台座主尊意和尚をいふ。近江國人、息

長氏、師僧は全阿闍梨、玄照律師なり。延長四年五月十一日  
宣命。年六十四。天慶三年二月十四日入滅。年七十五。贈  
僧正法印大和尚位。

仁王會 — 鎮護國家の爲に仁王般若經を講説する講會なり。  
さゝ波よする汀の月 — 千載集第四卷、秋歌上に載す、藤原  
顯家の歌に、「月影は消えぬ氷とありながらさゝ波よする  
志賀の辛崎」とあり。

比叡の御嶽の秋なれや — 玉葉集第五卷、秋歌下に載す、前  
大僧正源惠の歌に、「世を祈るわが立つ袖の峰晴れて心より  
すむ秋の夜の月」とあるを引く。  
都の富士 — 京都に比叡山を富士に見なしていふ。  
三上山 — 比叡山の東、俗に近江富士といふ。

佛法最初 — 天台宗の開けし寺の意。  
我立つ袖に冥加あらせてと云々 — 新古今集第二卷、釋教歌  
に載す、傳教大師の歌に、「あのくたらさみやくさんほだ  
の佛だち我立つ袖に冥加あらせたまへ」とあるをいふ。三藐  
三菩提とは、具さには阿耨多羅三藐三菩提（Anuttarasamyak  
sambodhi・アヌッタラサムヤクサンボドヒ）といふ。三藐  
は正の義、三は遍の義、菩提は智の義なり。故に正遍智と譯  
す。遍く一切の法を知るの意にして、佛の特性をあらはす別  
號なり。即ち歌意は、無上正遍智の諸佛よ、我が中堂建立の

めでたく成就するやうに加護せられてとの意なり。

中門 — 總門の中にある門。  
丞相 — 菅原道真是右大臣なりし故にいふ。唐名にて左大臣  
を左丞相、右大臣を右丞相と稱す。

師弟三世に — 過去、現在、未來の三世かけたる師弟の縁。  
師の御影をば — 沙彌威儀經に、「入城乞食時、當隨師  
後、不得以足踏師影」と説示しあるをいふ。

菅相公の養ひに — 菅相公は參議菅原是善にして、道眞の父  
なるをいふので、此處は是善の養子といへるなり。  
親子の契り — 是善と道眞と。

風月の窓に月を招き云々 — 後漢の任末が月光を燈火に代へ  
讀書せし故事。即ち學道に心の明かなることをさす。  
螢を集め — 車胤が螢を集めて燈火に代へ讀書せし故事。即  
ち苦學螢雪の謂ひなり。

言葉の泉 — 詩文の出で来る源。  
一字千金 — 明衡往來に、「一字千金德馨難忘」とあり。注  
に、「人學一字以千金可報也」とあり。

此世にての望みは叶はず — 冤罪の名を雪ぐ能はざりしこと  
をいふ。  
我にうかりし雲客 — 我に薄情なりし公卿をさす。

妻戸 — 兩開きになりたる戸。

洒水の印 — 水もて火を消す行法。

紫宸殿 — 南殿ともいふ。承明門の内に入り。

普門品 — 法華經第八卷、第三十品。

紅蓮 — 地獄の名稱。

率土四海の内は — 詩經、小雅、北山篇に、「普天之下莫非

王土、率土之濱莫非王臣」とあり。

弘徽殿 — 清凉殿より北の方にあり。

清凉殿 — 紫宸殿の西北方にあり。

梨壺 — 昭陽舎といふ。紫宸殿より東北の方にあり。庭に梨

の木を植ゑたる故に此名あり。

梅壺 — 凝華舎といふ。弘徽殿の西方にあり。是も梅を植ゑ

たる故に此名あり。

晝の間 — 天皇晝間の御座所、即ち清凉殿をさす。

千手陀羅尼 — 千手觀音に祈誓する誦文。

雷鳴の壺 — 豊芳舎のこと。梅壺の北隣。昔雷の落ちたるに

よりてかく名づく。

荒海の障子 — 清凉殿の廣庇の間に立ちたる障子をいふ。

### 間狂言

法性坊の従者。

かやうに罷り出でたる者は。比叡山延曆寺の座主。法性坊の僧正に仕へ申す者にて候。さる程に菅丞相と申す御方は法性坊

り。折節柘榴をとつて嚼み碎き妻戸に吐きかけ給へば。忽ち  
火焰と成つて燃え上るを。僧正少しも驚き給はず。洒水の印  
を結び掛け給へば。難なく火焰は消ゆる程に。その煙と共に  
うち紛れかき消すやうに失せ給ふ。さて禁中に亂れ入るに誠  
に鳴神の事なれば。晴天にありつるも俄かにかき曇り。黒雲  
空に引き覆ひ。大洪水を出だして大内を鳴り廻り震動致すに  
より。公卿殿上人驚き給ひ急ぎ僧正に御参りあれとの勅使。  
一度ならず二度ならず兩三度まで立つにより。是非に及ばず  
御参内なされうするとの御事ぢや。即ち御用意遊ばすとはい  
へどさすが御参りの事なれば。次第々々の御供役人を召し連  
れらるゝにより。未だ御出でなされぬ。さりながら先この巻  
敷をさへ持ちて参れば。僧正の御参りありたるも同じ事と思  
ひ。取る物取りあへず罷り出た。少しも時刻移りては成るま  
い程に急いで参らうと存する。あら不思議や。今までよき天  
氣なるが俄かに雲の氣色が變つた。さてもく凄しい空かな。  
鳴神の事なれば何時鳴らうとも知らぬ。某一人行く事はこわ  
ものぢや。こゝ許にて頼うだ人を待ち御供仕らうする。それ  
ならばこの邊の人を頼み申すぞ。僧正の御出であらば。此方  
へ御知らせあれ。構てその分心得候へ〜。

の御弟子なるが。時平の大臣の譏奏により。思はざる外に遠流  
の身とはなり給ひ。筑紫にて空しくなり給ひたる由承る。然  
るに我等の頼み申す御方は別行の子細あるにより。百座の護  
摩を焚かせ給ひ。心肝に銘じて御入りある頃。いつくともな  
く中門の扉を敲く程に。不思議に思ひ物の隙より見給へば。  
正しう菅丞相にて御座す。その時頼み申す人の胸うち騒ぎ肝  
を消し給ふといへど。さすが貴き僧正の事なれば。少しも色  
には見せ給はずさらぬ體にて戸を開き。あら珍しの丞相やま  
づ内へ御入りあれと招じ申すれ。さながら生きたる人に物を  
言ふ如くに。互に様々の御雑談ありて後。其方は筑紫にて果  
て給ひたると申す程に色々弔ひを致したるが。定めて届かぬ  
事はあるまじきと仰せらるれば。逆様なる御弔ひに預り申す  
事誠に以てありがたう存する。殊更幼少より別して菅相公が  
養ひにてこの寺に入り寵愛給ふせめて御禮に伺候致いた。さ  
て又我等の存生にありし時。某に悪事を申しかけし雲客を退  
治致さんと存する間。雷電となつて大内へ亂れ入るべし。そ  
の時僧正を召しに参らうする。譬へ幾度勅使立つとも必ず御  
参内あつて下されなと申さるれば。頼み申す人は委細心得存  
する。勅使兩度立つまでは参るまじい。若し三度にも及ぶな  
らば。王土に住む身の如何で勅をば背くべき。迷惑ながら参  
内申さうするとあれば。菅丞相の氣色俄かに鬼面の如くに成

半切（ハシキリ） 襦袢男・神・鬼等の強き役の袴に用ひ、用途甚だ汎し大口と形全く等しきも、地質異なりかつ全織等にて



妍美様々の模様を置く、これを字板・續公海等の上に穿らば更に法被・狩衣・厚板・壺折等を重ねます

装束附（雷電）

作物	後シテ	ワ後キ	前シテ	ワキ
	雷神	法性坊 律師僧正	香丞相	法性坊 律師僧正
一疊臺・二	面、髷 赤頭 色鉢巻 襟紺 着附厚板 半切 法被 續紋腰帶 打杖 鬘斗目被キ	金入角帽子 掛絡 着附小格子厚板 口大口 紫水衣 緞子腰帶 數珠 扇	面、天神又ハ三日月 黒頭 鉢巻 襟淺黄 着附無地鬘斗目 水衣 續紋腰帶 扇	角帽子 着附無地鬘斗目 水衣 緞子腰帶 扇 數珠

雷電

素謡座席順 ワシキテ



早僧サシ上（ハルカクサシ） 比叡山延暦寺の座主法性坊の律師僧正にてゆ。さてもわれ天下の

お祈禱のため。百座の護摩を焚

きゆが。今日満冬にてゆ程に。やがて

仁王會を執り行はばやと存じゆ

げにや惠みもあらたなる。影も日

吉の年ヨシノトシ吉アりて誓チカひぞ深フカき湖ウミのさサ  
 波ナミ寄ヨする江エの月ツキ 上歌 名ナにニおオふ比ヒ叡エ  
 の寺テ嶽タケの秋アキなれやヤ 比ヒ叡エの寺テ嶽タケの  
 秋アキなれや。月ツキは隈クマなナまマ名ナ所ショの都ト  
 の富トヨ士シと三ミ上カミ山ヤマ法ホウの燈トウ火カおオのノづヅか  
 ら影カゲ明アキラらラけケきキ惠ケみミこコそソ人ヒトをヲ渡ワタらス  
 ぬ誓チカひヒなナれレ人ヒトをヲ渡ワタらスぬ誓チカひヒなナれ

三子丞相サシ上ミコサニシヤウサシノカミ

拍子ウチマツリ合アヒスス



ありがたやこの山はニ姓ナ吉キよりリ佛ブツ法ポフ  
 最初サハの御ミ寺テなりリげゲにニやヤかりリそソめ  
 の値チ遇グもモ空カラしシからラずズわワがガ立タつツ松マツに  
 冥ミヤ加カあアらラせセてテと望ノゾみミをヲ叶カナへヘ給タマへヘて  
 満マン山サン護ゴ法ホフ一イツ列リツしシ中チュウ門モンの扉ヒラをヲ敲タカ  
ワヤ詞ジ 拾 タリ 深フカ更シにニ軒ケン白シロくク月ツキはハさ  
 せセぞゾも紫シのシ戸ドをヲ敲タカくクへヘまマ人ヒトもモ覺オ覺ホえ



ぬに如何なる松の風やらんあら不  
 思議の事やな 聞けば内にも  
 わが聲を怪しめ人の咎むるぞと重  
 ねて扉を敲きけり 餘りの事  
 の不思議さに物の隙よりよくよく  
 見ればこれは不思議や丞相にて  
 まゝますぞや心騒きておぼつかた

○小謡

シテ詞

頃しも今は明けやすき月にひか  
 れてこの庵の樞を敲けば内より  
 も不思議やさては丞相かはや  
 此方へと 夕月の影珍しや客  
 人の影珍しや客人の稀にあ  
 時はなかなか夢の心地していひ  
 やる言の葉もなし上人も丞相も





心解けて物語。世に嬉しげに見え  
 給ふ。あはれ同。世の逢瀬とこ  
 れを思はぬや逢瀬とこれを思は  
 めや。 ワキ詞 カリメニ こそ御身は筑紫にて果  
 て給ひたる由承り。の程に。色々  
 弔ひ申して。のが届きぬやらん  
 シテウケテスアリ  
 なかなかの事御弔ひ悉く届きて

ありがたうの秋に後る。老葉は  
 風なきに散り易く。愁ひを弔ふ  
 涙は向はざるにまづ落つ。されば  
 貴きは師弟の約。切なるは主従  
 睦まきは親子の契りなり。これ  
 を三悌といふとかや。 シテ中 中にも眞實  
 の志の深き事は。師弟三世に若く

○獨吟



はなし下歌同 忝カヘテしや師シの御影ミカゲをば  
 いかで踏フミむべキきいとけなかりしそ  
 の昔カミは父チチもなく母ハハもなく行方ユキカタ  
 も知らぬ身ミなりしを菅相公スガノサウキウの  
 養ヤシひに親子オヤコの契チケりいつの向ムカに有アリ  
 明月メイゲツのおぼろけに憐アハレみ育ソダて給タマふ  
 事真コトマコトの親オヤの如ごとくなり。さて勸学カンガク

の室シムにハ入イり僧ソウ心シンを頼タノみ奉ホウり風月フウゲツ  
 の窓マダに月ツキを招マツき螢ホタルを集ツめ夏虫ナツムシの  
 心ココロのうちも明アカかに筆フデの林ハヤシも枝エダ  
 茂シり同言葉コトバの象ゾウ盡ツクきもせずハ文フミ  
 筆フデの堪タ能ノよク人も悦ユキび思オモしめし  
 荒アラき風カゼにもあてアてと御志ミコシの今イマま  
 てもハ一字イチジ千金チンギンなりいかでハ忘れワスレ申マウす

づま。われこの世にての望みは叶は  
 ず。死しての後梵天帝釋の御憐み  
 を蒙り。鳴る雷となり内裏に飛び  
 入り。われに憂かりし雲客を蹴殺  
 すべし。その時僧正を刃をこれゆべし。  
 かまへて御参りゆな。たとひ宣旨は  
 あつといふとも。二度までは参るまじ

シテ  
いやは後度々  
参らるる



いやは勅使度々重なるとも。かまへ  
 て参り給ふなよ。王ぶに仕める

シテカル上  
ツヨク  
拍子ま合

○仕舞  
おとつて  
せん舞



この身なれば。勅使三度に及ぶな  
 らば。いかでか参内申さざらん  
 その時丞相姿俄かに變り鬼の  
 如し。をりあし本尊の御前に。柘  
 榴を手に向け置きたるを。おとつて



啗カ又ハ碎クきダ。おハつツつツてツ啗カ又ハ碎クきダ。妻メ

戸ドにクわツつツとツ吐ハきハかケ給ハばハ柘シ榴リ

忽トちチ火カ焰エンとナつツてツ扉ヒにハつツとツ

燃モえエ上ウるル。僧ソウ正セイはハ紫シ宸シン殿デンにシ坐ザしシ。數ジ珠シュ

色シもモまマしシまマさサずズ。洒シ水スイのノ印インをヲ結ムス

んでデ。鏝ペン字ジのノ明メイをヲ唱ナへヘ給ハばハ火カ焰エン



はハ消シゆユるル。煙エンのノうウちチにニまマちチ隠カれレ丞シヨウ

相サウはハ行キョウ方ホウもモ知チらラずズ。失シツせセ給ハばハ行キョウ方ホウ

もモ知チらラずズ失シツせセ給ハばハ。中チュウ入ニツ間カマ

さサてテもモ僧ソウ正セイはハ紫シ宸シン殿デンにニ坐ザしシ。數ジ珠シュ

さサらラとトおオしシ揉モんンでデ。普フ門モン品ヒンをヲ

唱ナへヘ給ハばハ。さサもモ黒ク雲ウン吹フきキ塞サ

がガりリ。闇ヤミのノ夜ヨのノ如ニくクなナるル内ナイ裏リ。俄トかカ

にニ晴ハれレてテ明メイ々々とトあアりリ。早ハヤ詞ジカカんン下ゲ確カキりリ。さサれレばハこコそソ



後ゴワキ上ウエ  
抽ヒキ三ミ合カヒハズ  
さサてもモ情ナヒはハ  
紫シ宸シン殿デンにニ



○獨吟



給タマハよハ上ノは。僧ソウ正マサなりとも恐オソるまじ。  
 われワレにニ憂ウレかりしシ雲クモ客カクにニ 同思オモひヒ知チらラ  
せん人ヒト々々よヨ。思オモひヒ知チらラせんセン人ヒト々々とトてテ小コ  
 龍リウをヲ引ヒきキ連ツれレてテ 急雲クモにニうウちチ乗ノ  
りてテ内ウチ裏ウラのノ四シ方ハフをヲ鳴ナりリまマはハれレば。  
稲光イナヒ稲イナ妻メのノ電デン光クワ頻ヒりにニ閃ヒラきキ渡ワり。  
 玉タマ體タマ危アヤくク見ミえエとトせセ給タマふフがガ不フ思シ議ギや。

僧正の御座り



僧ソウ正マサのノおオはハすスるル所トコロをヲ雷ライ怒ドれてレ鳴ナらラ  
ざりリけケるルこコとト奇キ特トクなナれレ。紫ムラサキ宸シ殿テンにニ僧ソウ  
正あアれレばバ。弘コウ微ビ殿テンにニ神カミ鳴ナすスるル。弘コウ微ビ殿テン  
に移ウツりリ給タマへヘばバ清セイ涼リョウ殿テンにニ雷ライなるル。清セイ涼リョウ  
殿にニ移ウツりリ給タマへヘばバ梨リ壺ウ梅バイ壺ウ書ショ晝シユのノ  
間夜マヤのノ御ミ殿テンをヲ行ユクきキ違チガひヒ廻マりリあア  
ひてテ。わワれレ考カウらラじジとト祈イノるルはハ僧ソウ正マサ鳴ナるル。

いんあひるんあつて  
追かけにけり



これまてなれや  
ゆるし給へ



寄る神にけり  
けれ



見まはるる神に  
けれ

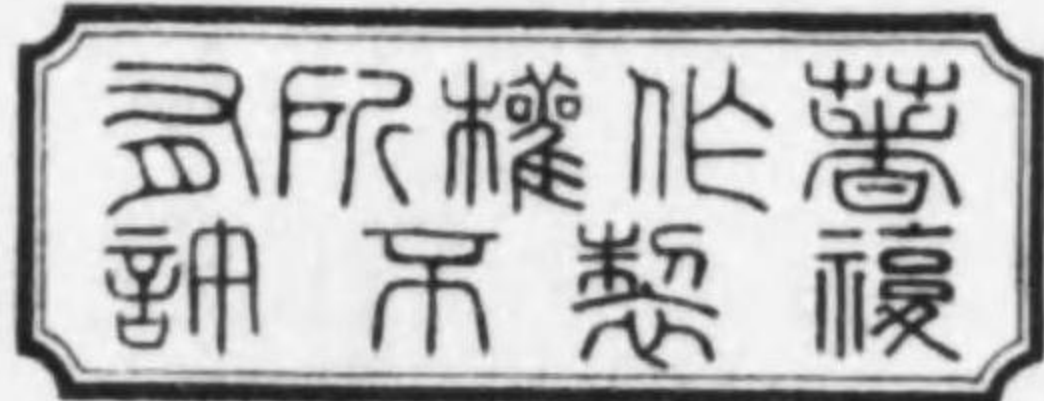


は雷もみあひもみあひ追かけ  
 おつかけ互の勢ひ譬へん方なく  
 恐ろしかりける有様かな。千手院  
 羅尼を満て給へば。雷鳴の壺にも  
 こらへず。荒海の障子を隔てこれ  
 までなれやゆるし給へ。聞法秘密  
 の法味に預かり。帝は天満大自

在。天神と贈官を。菅丞相に下され  
 ければ。嬉しや。生きての恨み死し  
 ての悦び。これまでなりや。これま  
 でとて。黒雲にうち乗つて。虚  
 空に上らせ給ひけり。

351

560



昭和八年九月十日納本  
昭和八年九月十五日發行

福木與書

訂定著作

觀世左近

發行兼  
印刷者

檜常之助

發行所

檜書店

京都店

京都市二條通麩屋町東北角  
振替大阪三六一番、電話上二九〇番

東京市神田區錦町二丁目十番地  
振替東京三五五二番、電話神田二五三番

圖書

丁



終

